

原発とテクノロジーの神学

栗 林 輝 夫

1. はじめに

1-1 原発のキリスト教的理解とは

福島第一原発の過酷事故は、日本人に先端テクノロジーの意味をあらためて問わせることになった。原発が日本初のメルトダウンを起こすという非常事態の中、人々が真先に求めたのは、原子炉でいったい何が起こったのか、原子炉を安定化するためにはどんな技術が必要かの情報だった。なぜ事故が起きたのか、どこが不都合で炉心溶融にまで至ったのか、どういう備えがあったら事故は起きなかったのか、技術的に足りなかったのは何か。人々は原子力のABCから、原子炉の構造、原発の安全技術、さらには放射能測定テクニックと、情報を必死に求めた。テレビやラジオの報道番組は、技術専門家や科学者をゲストに招いて特別企画を編成し、放射能漏れという事態に対応しようとしてこ舞いをした。それから、そもそも技術は人間に何をもたらしたのか、技術は良いものなのか、悪いものなのか、というテクノロジーの根本的性格にまで議論が及ぶのに、さほど時間はかからなかった。

現代が「技術の時代」であることは言うまでもないが、日本では技術は善であるとの空気が支配的で、人間生活を向上させ、飢え、病い、貧困から人類を解放すると単純に信じられてきた。とくに明治の開国以来、日本は欧米の先進技術の導入を通して、近代国家への脱皮をはかり、「和魂洋才」を合言葉に、精神は日本的でも、科学と技術は西洋に範を求めることで、欧米と肩を並べようと猛進してきた。第二次大戦に敗れた後は、それにさらに拍車がかかり、「技術立国」をめざして官民一体で革新に努めた（佐

和隆光『文化としての技術』)¹。資源の少ない島国のこと、欧米並みの生活水準を維持しようとするなら、高度な技術の開発こそが鍵という思いで国民が一致し、その努力の甲斐あって、日本は奇跡的復興を遂げて、世界に冠たる「技術大国」になった。資源小国であるにもかかわらず、日本がめざましい経済発展を遂げたのも、ひとえに技術の力と素朴に信じられていた。そのようなわけで、日本ではテクノロジーは善との受け止め方が一般的で、それを哲学的、宗教的に問うことはごく稀でしかなかった。

しかし、近代技術の揺籃地キリスト教ヨーロッパでは、技術は人間に益するか否かが、哲学的にも神学的にも熱く論じられてきた。はたして技術は人間を幸福にするか。いや、技術は人間を幸せにするどころか、破滅への道に誘っているのではないか。人類が技術を今後も活用するとすれば、どんな種類の技術を伸ばせばいいのかと、技術の本質や方向が神学議論的になったのである（H.サン「技術の神学的一考察」）²。

現代日本の標語が「技術立国」であるにもかかわらず、日本の神学が「技術」を真剣に受け止めてきたとは言い難い。「現在のわれわれは、自然科学や技術のつきつける問題について、神学的検討を行っていない」。環境科学者の古谷圭一はすでに79年、「信仰・科学技術・未来」を主題にマサチューセッツ工科大学で催された世界教会協議会の報告のなかで、日本における「科学に関する神学、技術に関する神学」の創出を訴えかけた³。神の創造を保全する義務を負うわれわれは、どのようなテクノロジーを開発すれば、人間と自然を破壊せず調和的に生きることができるのか。古谷は、技術にいかなる姿勢で臨み、それをどう使いこなせばいいのか、それが神学的にも問われている

1 佐和隆光『文化としての技術』（岩波書店、1991年）8頁以下の「戦後民主主義と技術革新」を参照せよ。

2 Hans P. Sun, “Notes on How to Begin to Think about Technology in a Theological Way,” *Theology and Technology*, Carl Mitcham and Jim Grote, eds., (Lanham, MD: University Press of America, 1984). 今日、技術は人間にとっての利便性の枠を超え、自然に対して善か悪かの環境意識にまで拡大しているが、この点は後に触れる。

3 古谷圭一「信仰・科学技術・未来——WCCの取り組みの歴史とMIT会議報告」『福音と世界』1979年11月号、25頁。また富坂キリスト教センター編『科学技術とキリスト教』（新教出版社、1999年）収蔵の古谷「科学と技術とキリスト教」を参照せよ。この編書の「解題」で古谷は、現代が「技術の時代」であるにもかかわらず、日本の神学が技術を論じることは稀であると指摘する（5頁）。

と論じたのである⁴。

キリスト教の観点からすれば、テクノロジーは道具、機械等を指す用語だけではなく、神の支配、もっと言えば「イエス・キリストの主権のもとに」統制されたユニークな人間活動である（S.ビショップ「技術のキリスト教的理解に向けて」）⁵。聖書的に言えば、神は「世界を創造され」た後、キリストを「万物の相続者」と定められた（ヘブライ人への手紙1・2）。イエス・キリストは世界の創造者であり、維持者であり、究極的な主権者である（J.スウェレンゲン『楽園を越えて—技術と神の国』）⁶。人間にとっての基本的な営みであるテクノロジーは、いかに世俗化されているとはいえ、このキリストの良き創造と維持に仕え、神の主権を侵害することがあってはならず、そこにテクノロジーが、しっかりと神学的に管理されなければならない理由がある（E.シュールマン『技術と未来』）⁷。

これを言い換えれば、テクノロジーは、世俗的技術論者が主張する「価値中立的」ものではなく、神の意志に服して救済的となるか、それとも逸脱して不服従になるかのいずれかであって、神学はそれを慎重に計らなければならない、ということである。すなわち、「人間の必要を満たすよう自然を形作る」技術は神の計画の一部であって、そのものとしては善である（P.マーシャル「現代技術——偶像か神の賜物か」）⁸。神は人間に技術を駆使する力を付与し、楽園喪失以後、人間が労苦を少しでも軽減できるよう取り図られた。アダムが喪った力を復興し、いやそれにも勝る力を人類に復興させて、地上に神の国を実現する手掛かりとされた。しかし墮落で生じた人間の罪は、同時に人間に技術を悪用して神の意志に反する可能性も生んだ。このゆえに技術は両義的であって、キリスト教は技術を、自律的な技術論者のように、もろ手を挙げて賛美することも、反対に、全面的に拒絶することもしない。むしろキリスト教の神学は、技術の目的、価値、世界観

4 古谷、同上。WCCの同会議は、技術科学とキリスト教の関係を考えるだけでなく、深刻化する地球の環境汚染、自然破壊に対するキリスト教会の指針を定める点でもエボックメイキングな会議であり、分科会では原発や核エネルギー問題も討論されている。

5 Steve Bishop, "Towards a Christian View of Technology," <http://www.scribd.com/doc/69999/Towards-a-Christian-view-of-technology>

6 Jack C. Swearingen, *Beyond Paradise: Technology and the Kingdom of God* (Wipf & Stock Publishers: 2007) p.285.

7 Egbert Schuurman, *Technology and the Future* (Wedge, 1984) p.5.

8 Paul Marshall, "Modern Technology: Idol or Divine Gift?" *Evangelical Review of Theology*, Vol.10 (July 1986) p.35.

を慎重に見極めて、悪魔的ないし偶像崇拜的（イザヤ44:12）ならば、それを批判して罪から贖い、キリストの主権のもとに連れ戻す義務がある（シュールマン、既出）⁹。

はたして原子力発電という現代の巨大技術は、キリスト教の観点から肯定できるものなのか。それとも、それを廃して代替技術の開発をめざすことが、神の創造にいつそう資するのか。終末のとき、神は人間を救済するだけでなく、あらゆる自然をも贖う（「被造物も、滅びへの隷属から解放されて、栄光に輝く自由にあずかれる」ローマ書8・21）。神はイエス・キリストの名によって、人間の墮落によって損なわれた自然を贖い、世界を新たに作る。

だが、神は「御子に、汚染された世界を継ぐよう求められるだろうか」¹⁰。キリストが世の主権者であるとの告白は、自然の保全に対して人間に責任を求める。今日、日本が直面する「原発問題」は、ただ原子炉や周辺機械設備の技術如何を問う以上のものがある。原発の投じる意味は大きく、人間の活動と文化の中核にまで及ぶと捉えるならば、原発技術の考察は、機械の具合、不具合だけでなく、社会、文化、そして教会の信仰にも関わらざるをえない¹¹。現代テクノロジーは徹底して世俗化され、神の戒めと無関係のように映る。技術が独り歩きして、神の意図とは違った方向に歩んでいるように見える。そこに、半世紀以上も前、神学者のディートリッヒ・ボンヘッファーが世俗的技術の暴走の危険を指摘した理由がある。

われわれが支配するのではない、支配されているのである。ものが、世界が人間を支配する。人間は捕虜、世界の奴隷であり、人間による支配は幻想に過ぎない。工業技術とは、地が人間をとらえ、人間を降伏させる力である。（中略）われわれが支配しないのは、世界を神の被造物として知らず、われわれの支配権を神から受けず、自ら強奪するからである。（中略）神に仕えることなしの支配はありえない。一方を失えば、必然的に人間は他をも失う。神なしでは、兄弟なしでは、人間は地を失う¹²。

9 Schuurman, *Technology and the Future*.

10 Swearingen, *Beyond Paradise*, p.285.

11 Arnold Pacey, *The Culture of Technology* (Blackwell, 1983) pp.4-7.

12 D.ボンヘッファー著、生原優訳『創造と墮落』（新教出版社、1997年）50-51頁。

今日の社会では、そのいかなる場面をとってみてもテクノロジーは世俗的であって、宗教に関わるわけではない。しかし、神は技術世界から一切身を引いてしまった、ということではない¹³。原発技術をキリスト教神学によって解剖することは、これまで問題とされなかった原発の宗教面に注意を喚起すること、そして、一般に疑われることのない前提に、キリスト教から批判を加え、そのことを通してまた日本の教会に神の言葉に「信従する」(potentia oboedientialis) 道を拓いて行くことなのである。

1-2 核テクノロジーとキリスト教の神学

核テクノロジーの歴史は浅く¹⁴、1895年のヴィルヘルム・レントゲンによる放射線の発見に端を発する。しかし、1932年、アルバート・アインシュタインが、原子力を人類が掌中に収めることは夢物語と語った事実からも明らかのように¹⁵、核技術は20世紀中盤から急速に発達し、その意味ではほやほやの技術である。ちなみに世界で最初に運転を始めた原発はソ連では1954年のオブニンスク原発であり、アメリカでは57年のペンシルヴァニア・ SHIPPINGポート原発だった。日本の最初の原発は1963年の茨城東海村の動力試験炉である。このように核テクノロジーの歴史はほんの半世紀あまりのことである。

しかし、その背後には、中世を起源とした長い西洋技術の歴史があり、それを支えたキリスト教の「技術の神学」があった¹⁶。日本では科学技術の専門用語に覆われて、ほとんど意識されないものの、西洋技術は、もの作りへの見方が劇的に転換したヨーロッパ中世に起源する。ギリシャ・ローマの伝統において、もの作りは奴隷や職人の仕

13 Swearingen, *Beyond Paradise*, p.49.

14 "Outline History of Nuclear Energy" World Nuclear Association, updated June 2010. blog. <http://world-nuclear.org/info/inf54.html>

15 Swearingen, *Beyond Paradise*, p.1.

16 従来、科学と宗教の関係問題は、有名なガリレオの宗教裁判やダーウィンの進化論論争、さらに「創造科学」等、かなり広範に論じられてきた。他方、技術と神学の関係はそれほど論じられず、立ち遅れがめだつ。今日の技術を神学的に批評するにはいかなる構想力が必要なのか。生命倫理を専門にする神学者ロナルド・コール・ターナーは、今日のキリスト教の最重要課題は、ひとつが科学と宗教、もうひとつが技術と神学の関係究明にあると指摘する(Ronald Cole-Turner, "Science, Technology and Mission," *The Local Church in a Global Era: Reflections for a New Century*, ed. Max L. Stackhouse, Tim Dearborn, and Scott Paeth (Grand Rapids: Eerdmans, 2000) p.101.福音派でもやや保守的なターナーは、創造主としての神論、そして神の似姿 (Imago Dei) としての人間観のキリスト教的伝統のもとで、

事であって、高貴な人間に関わるべきものではなかった。ところが、それまで軽蔑されていたものの作りが、この時代、人間を解放する神の救済手段として積極的な認知を得、それに携わる技術者間に宗教的召命観を生み出した。そうした西洋技術観の上に20世紀で開花したのが核のテクノロジーだった。言い換えれば、核テクノロジーの誕生は、「それまでの歴史を打ち砕くと同時に、人類を解放する」というキリスト教の「黙示録的な宗教性」が背後にあったのである（ノーブル『技術の宗教』）¹⁷。

科学技術史家のノーブルによれば、西洋の技術はキリスト教の「神話」とそれに纏わる神学に誕生の秘密がある。核技術もその延長上で「人類史の新しい幕開け」という、キリスト教の黙示録的待望を孕んでいる¹⁸。現代の技術者のほとんどは、宗教とは無関係に技術開発に勤しむ。しかし、そうした勤しめと熱意は、起源をたどれば、中世修道士らの現世を贖う神の救済、人類贖罪の渴望に根差す（ノーブル、前掲書）¹⁹。

第二次世界大戦中、原爆製造を目的にニューメキシコのロスアラモス研究所に参集した科学者、技術者たちは、核分裂がもたらす科学上の成果、いや人類史の一大転換の可能性に胸を躍らせ、これから行おうとする実験の巨大な潜在力を強烈に意識していた（P.ボイヤー『爆弾の初光によりて——原子力黎明期のアメリカの思想と文化』）²⁰。13世紀のイングランドの哲学者ロジャー・ベーコンは、原爆の誕生をさかのぼる7世紀前、ローマ教皇クレメンス4世に宛てて書簡を送り、教会が科学技術を積極的に推奨し、かつそれをしっかり監督するよう進言した。その理由は、もし「反キリスト」（ヨハネ第一の手紙2・18等）の勢力が革新的技術の数々を手に入れば、悪用してキリスト教世界にと

テクノロジーとの対話を提案する。ターナーは、考えられうる神学と先端技術の関係は、神の祝福にある技術、神と無関係な技術、神の「然りと否」のなかにある三つであると論じる（「そもそも神学は技術の理解を試みるべきなのか。一方に神、他方に技術と二つの言葉を並べたとき、そこに何かの繋がりを探れるだろうか。神学は現代テクノロジーに積極的な意義を認めて、神のわざをそこに見るべきなのか。それとも、技術は神と無縁と突き放すべきか。さらにはテクノロジーの神学を試みて、テクノロジーの起源を探り、その意味を明らかにして、方向を与えたりブレーキをかけたりするべきなのか」）。本稿が試みるのは、ターナーが提案したうち第三の項目である。

17 David Noble, *The Religion of Technology* (Penguin Books, 1999)

18 Noble, *The Religion*, pp.21-34.

19 Noble, *The Religion*, p.3.

20 Paul Boyer, *By the Bomb's Early Light: American Thought and Culture at the Dawn of the Atomic Age* (The University of North Carolina Press, 1985)

てつもない災いを招かないともかぎらないからである。ベーコンは伝統的なアリストテレス的論法ではなく、当時としては最先端のイスラム科学に学び、いっそう実証的な研究をめざして次々に成果をあげていた。フランシスコ派修道士の彼の手からは、数学、物理学、化学、工学など、多岐な分野で数々の理論と発明が生み出され、後世の顕微鏡や飛行船、蒸気機関の出現さえ予測されていた。つまり、ベーコンは反キリストが技術を悪用することを危ぶみ、新しい技術はカトリック教会の正義、愛、公平という徳目の内にしっかりと統制されていなければならない、と具申したのである。

第二次大戦直前、アメリカに亡命中のユダヤ人原子物理学者たちが、核分裂の巨大な破壊力を、当時の大統領ルーズヴェルトに警告し、アメリカが原爆開発に一日も早く着手するよう訴えたのも、実にこのベーコンのローマ法王への進言と動機を同じくする。当時、物理学の最先端を走っていたのはドイツであって、彼らはドイツが原爆製造に着手する可能性が大であり、そうなれば連合国の勝利は覚束なくなると怖れた。ヒトラーのナチス・ドイツという悪の勢力よりも、アメリカという民主的な善の勢力が核開発に先んじなければならない。正しい者の手にあってこそ、核は人類救済の手段になる。原爆は戦争の暗い歴史に終止符を打ち、世界に平和と協同の新時代をもたらすにちがいない。ロスアラモスの科学者、技術者たちは、原子力の未曾有のエネルギーをもたらす専門集団として、宗教的使命感すら帯びて、開発に日夜没頭したのである（R. ローデス「原爆の創造」）²¹。

実際、核の連鎖反応による巨大な破壊力を、アインシュタインを介してアメリカ大統領に警告したユダヤ人物理学者レオ・シラードは、核テクノロジーを、地上の労苦から人間を解放するものとして積極的に捉えていた。まだドイツで核物理学研究に熱中していた30年代、シラードの魂を鼓舞していたのは、人類を救済するという宗教的とも言える召命観だったという²²。核エネルギーの放出を通して、人類は地球のみならず太陽系さえ離れて広大な宇宙に進出していくことも可能だ。そう確信したシラードは、同じ使命感に燃えた技術専門集団の糾合を夢見、ヨーロッパから数多くの物理学者、科学者の亡命を援助

21 Richard Rhodes, *The Making of the Atomic Bomb* (New York: Simon and Schuster, 1986) pp.21-23.; Noble, *The Religion*, pp.104-105.

22 Rhodes, *The Making*, p.25.

し、当時としては最大規模の技術プロジェクト、マンハッタン計画の最先頭に立った。核物理学の父エルネスト・ルサーフォードが驚嘆をこめて「まったく新しい錬金術」と呼んだ核分子変換理論を発展させ、核分裂の未曾有のエネルギーを、人類の救いに役立たせたいと切望していた。そこにはシラード自身が意識しようとしまいと、ヨーロッパのキリスト教世界に連綿と続いていた、人類救済というキリスト教的技術観が、世俗化された姿とはいえ厳としてあったと言える。

なぜ現代の技術が西洋に起きたのか。世界に複数ある文明のなかで、なぜ科学が、キリスト教ヨーロッパで成立したのか。歴史家はさまざまにその理由を説明してきたが、いづれにしても、近代技術の誕生地、キリスト教的ヨーロッパにおいて、テクノロジーに対する評価は大きく二分されて今にいたる²³。一方にあるのは、テクノロジーは人間に高い生活水準という恩恵をもたらし、たとえ一時的な不都合や齟齬が生じたとしても、それも技術の改良によって解決できるという楽観的技術観である。他方、技術、とりわけ近代の技術は人間を幸せにしない、自然環境を悪化させ人間の自由も損なわれるという悲観的な技術観もある（A.タイク『技術と未来』）²⁴。そのいずれを取るにせよ、少なくとも西洋では、技術発展の背後には技術を支えた宗教的な要因が介在していること、そして、アウグスチヌス以来、「技術の神学」は西洋キリスト教の長く顕著な伝統の一部となっていた。技術をキリスト教抜きに論じることができないのは明らかなのである（A.ボーグマン『力の喪失——技術文化のキリスト教』）²⁵。

23 Ian G. Barbour, *Ethics in an Age of Technology* (New York: HarperOne, 1993) 3-25.

24 Albert H. Teich, ed., *Technology and the Future*, 5th ed. (New York: St. Martin's Press, 1989) ; Carl Mitcham and Robert Mackey, eds., *Philosophy and Technology* (New York: Free Press, 1972)

25 Albert Borgmann, *Power Failure: Christianity in the Culture of Technology* (Grand Rapids, MI: Brazos Press, 2003), p.81. また Barbour, *Ethics*, pp.3-25.を参照のこと。

2. 原発は「神の国」をめざす

2-1 技術の未来は明るい——楽観的技術観

「原子力の誕生をもって人類史は新たな段階へと突入した」(H.メッツ「原子の夜明け」)²⁶。日本への原爆投下直後、アメリカ大統領トルーマンは、「原子エネルギーは従来の常識では計測できないほど革命的である」と、高揚した気分で議会に報告した(J.オニール『全能の原子——原子エネルギー実話』)²⁷。原子力は人間に高い生活水準を約束し、人類の生存に不可欠なエネルギーを確実に手にいれさせてくれる。農工業は飛躍的に拡大し、医療でも、放射線治療は人間の健康維持に大活躍するにちがいない。トルーマンは、人は過酷で単純な労働から解放され、以前にはまったく考えられないほどの物質的豊かさにめぐまれ、長い人類の夢だった飢餓と病気からの解放がはじめて現実になったと、原子力を絶賛したのである。

一国の大統領からして、原子力は人類に絶大な恩恵をもたらすと有頂天なのだから、世論は推して知るべし、アメリカは原発の薔薇色一色に染まった。庭の塵箱より小さい簡易型の家庭用原発が、数年以内にも発売されて電気の供給問題は一挙に解決する。「このミニ原子炉は核兵器に用いられる危険物質を含まれず、工場で密封されたまま、家の庭裏の地中深くにコンクリートで埋められるので盗難の心配も御無用」²⁸。ロスアラモス研究所の科学者は戦後直後の雑誌にそのように寄稿した。原子力草創期には、そんな核の夢がいたるところで語られ、原子力は地球の全人類を幸福にする切り札、「奇蹟の力」と賞賛された(ボーヤー、既出)²⁹。原子力は人類に未来を拓き、以前には想像もつかなかった利便性と快適性、サービスを供給する。原子力革命は社会を変え、莫大な雇用を創出し、人間に自立する機会を備えて、人類を停滞から救い出す。かつてレジャーと文化的生活を享受できたのはほんの一握りの特権階級だけで、ほとんど

26 Homer Metz, "Atomic Dawn," *Christian Science Monitor*, February 21, 1947, p.2.

27 John H. O'Neill, *Almighty Atom: The Real Story of Atomic Energy* (New York, 1945) p. 81.

28 "Mini Nuclear Plants to Power 20,000 Homes," *The Wittenberg Door: Theology and Life, blog*, Nov. 9, 2008. <http://thewittenbergdoor.blogspot.com/2008/11/mini-nuclear-plants-to-power-20000.html>

29 Boyer, *By the Bomb's*, pp.106-140.

の人間はそれどころではなく、生きるのが精一杯だった。しかし原子力は生産の在り方を根底的に変え、人間の労働時間を短縮し、圧倒的な多数が教育、芸術、スポーツ、地域活動に参加できる余裕をもたらすにちがいない。

こうした原子力の薔薇色のユートピアを根底で支えていたのは、科学技術の進歩が人類を限りなく幸福にするという、啓蒙主義以来の世俗的で楽観的な技術観である。技術を積極的に展望する人々にとって、テクノロジーは人類を豊かにする手段そのものだった。とくに技術が全面的に開花する都市空間では、人々の消費意欲は満たされ、快適な生活が保証され、活動の限られた農村部より数倍、人を自由にするだろう (M. クランツバーグ『20世紀の技術』)³⁰。技術はときに不都合を生じて思わぬ災害を招くことがある。しかし改良を施せば、技術の恩恵は無限である。どんな技術にも多少の弊害はつきもので、それを改善し問題の合理的解決を企てるこそ技術者の腕の見せ所である。もし技術が悪影響を生むなら、それを解決するのも技術であって、新しい技術は古い技術を駆逐し、次第に完全になっていく。二〇世紀の初め、工場はどこも不衛生な上に危険に満ち、事故が頻発していた。労働者は肺病など深刻な健康被害を蒙り、機械の不具合から重大な事故が起きることがしばしばあった。しかしそれに改善が施されて、今日ではこれが工場かと思間違えるほどの快適空間が実現され、働く者の創意と創造性を引き出す格好の場になっている。楽観的で世俗的な技術者はテクノロジーを賛美して、その明るい未来を描いて止まらないのである (E. メッセン「技術は悪か?」)³¹。

そんな積極的技術論者の一人サミュエル・フロアマンは、技術に依存することで人間の生はいっそう空虚になった、昔はそんなではなく、もっとゆとりと温かさがあったという批判に対して、それは過去のロマン化にすぎないと一蹴した (フロアマン『技術批判——

30 メルビン・クランツバーグ、キャロル・W・バーゼル2世著、『20世紀の技術』(上下巻、東洋経済新報社、1976年)。なおクランツバーグの技術観については、「技術の善し悪し」『環境技術』22号12巻、環境技術研究協会、平成5年12月、55-58を参照のこと。クランツバーグの立論は技術の善悪と中立性を超えるとの見解もあるが、ここではバーバーのクランツバーグ解釈を踏襲する。Melvin Kranzberg, "Technology the Liberator," *Technology at the Turning Point*, ed. William Picktt (San Francisco: San Francisco Press, 1977)

31 Emanuel Mesthene, "Technology as Evil: Fear or Lamentation?" *Research in Philosophy and Technology*, vol.7, Paul Durbin ed. (Greenwich, CT: JAI Press, 1984)

謂れなき生贄」)³²。そんな批判が当たらないのは、ヨーロッパの産業化前の人間の暮らし振りと今を比べてみれば、一目瞭然ではないか。かつて人間の生活水準はきわめて低く、労働は過酷で、職業選択の自由はなく、人は親の職業を受け継ぐ他なかった。しかし技術革新は人を飛躍的に自由にした。たとえば、交通技術の発展は大勢の人間を好きな時に、好きな場に労なく移動させることを実現し、そのことで文明を大きく変え、社会階級の流動性すら生み出した。今日、人が田舎よりも大都会への移住を希望するのは、都会が格段に快適かつ魅力的な空間だからであって、テクノポリスに生きる人間は、酷評される程、疎外されているわけではない。文明評論家がしたり顔で、機械の奴隷になったと指摘するブルーカラーは、気苦勞の多い管理職や経営者を尻目に、機械相手の単純作業に安心感を抱いている。巨大技術はいったん稼働すると抑制が利かなくなるという批判もあるが、とんでもない。技術は市場原理の「見えざる神の手」によって自由に廃棄、交換される弾力性をもつ³³。先端テクノロジーの典型たる原発に対して、巷には放射性廃棄物の処理など、未解決な課題を危ぶむ声がある。しかし、そもそも原発は専門知識のないアマチュアには複雑すぎ、公聴会の討議を義務づければ、かえって社会に不安と混乱を招く。餅は餅屋の喩えどおり、技術は「揺るぎないプロ意識」に徹した専門家に任せるのが最善の道である³⁴。——こうして「技術の不備には技術で対処

32 Samuel Florman, *Blaming Technology: The Irrational Search for Scapegoats* (New York: St. Martin's Press, 1981) p.183. フローマンによれば、自然の環境汚染と人間の健康障害は、技術進歩には避けられない出来事である。いかなる製品であれ、製造工程をより安全にしようとするれば、技術的に不可能ではないものの、それでは経済コストが跳ね上がって採算にあわない。経済成長を優先し、消費者に低価格の製品を供給しようとするれば、安全はどうしても二の次にならざるをえない。そもそもテクノロジーに「絶対的安全」はありえない。大規模テクノロジーは、いったん稼働すれば、小規模テクノロジーより効率的、かつ安価な製品を供給できる。したがってフローマンは「技術的調整」を促進するほうが、人間の消費行動を変えたり政治的合意を得るより、いっそう望ましいと結論する。Cf. Alvin Weinberg, "Can Technology Replace Social Engineering?" *Technology and the Future*, ed. Teich.

33 ; Florman, *Blaming Technology*, p.183.

34 ダニエル・ベル著、内田忠夫他訳『脱工業化社会の到来——社会予測の一つの試み』(上下)ダイヤモンド社、1975年)。社会学者のベルは、現代はすでに物の所有より「知の所有」の時代であって、イデオロギーは問題ではないと主張する。すなわち、今日は専門的技術集団が統計やシステム論を駆使して、社会を計画的に運営する「ポスト工業化社会」に突入しており、社会の主導権は技術者、科学者、エンジニアの手において、大学研究所、企業ラボ、シンクタンクが「支配の場」になったと論じる。

する」とのベンジャミン・フランクリンの格言を座右の銘にしたフロアマンは、技術は時に想定外の事態を生じることもあるが、それも技術で解決できると、あくまで強気である³⁵。

ことさら機械を恐れたり非難するのではなく、人類の未来に向けていっそう技術開発に専念すべし。そうした技術積極論はアルビン・トフラーを始め³⁶、バックミンスター・フラー、ハーマン・カーンなど、日本にも多くの支持を得た「フューチャリスト」の潮流となって今日にいたる。科学技術こそが人類の未来を切り開くと確信する、こうした未来論者にとって、原発は勿論のこと、ナノテクノロジー、遺伝子操作、バイオ・エンジニアリング、ロボット、インターネット等のテクノロジーは、人類の歴史を開拓する輝かしい成果に他ならないのである³⁷。

2-2 技術は神学的救済の手段——神学的見解

技術は人類に高い質の生を約束し、人間をいっそう自由にする。技術は経済の成長を促し、社会の困難を解決する鍵であって、誰もその開発を妨げることがあってはならない——こうしたテクノロジーの積極的な受け止め方は神学の長い伝統である³⁸。17世紀イングランドの神学者フランシス・ベーコンは、技術は神が人間に与えられた特別な力であると論じた。これによって人間は自然を統御し、エデンの園で享受したものの今は失ってしまった創造の支配権を復興する、と言うのである³⁹。現代で楽観的技術観を採る神学

35 Samuel Florman, "Science for Public Consumption: More Than We Can Chew?" *Technology Review* 86 (April 1983): 12-13.

36 Alvin Toffler, *Previews and Promises: An Interview with Alvin Toffler* (Boston, MA: South End Press, 1983) A.トフラー、H.トフラー共著、山岡洋一訳『富の未来』上下巻(講談社、2006年)等の、一連の著作を参照のこと。

37 バックミンスター・フラー著、梶川泰司訳『クリティカル・パス—人類の生存戦略と未来への選択』(白揚社)、ハーマン・カーン『未来への確信——成長限界論を超えて』サイマル出版会、1976年;アルビン・トフラー著、徳山二郎訳、『未来の衝撃——激変する社会にどう対応するか』(実業之日本社、1970年)、鈴木健次他訳『第三の波』(日本放送協会、1980年)、徳岡孝夫訳『パワーシフト—21世紀へと変容する知識と富と暴力』(上下)、(フジテレビ出版、1991年)。技術万能主義を楽観的精神論に繋ぐアメリカのニューエイジの傾向は、船井幸雄、『脳内革命』の春山茂夫、ソニー創業者の井深大など日本にも散見される。

38 Barbour, *Ethics*, p.7.

39 Francis Bacon, "Novum Organum," *Works*. James Spedding and others eds., (London: Longmans Green, 1870), vol.4, p.247. 桂寿一訳『ノヴム・オルガヌム——新機関』、(岩波文庫、1978年) (原著は1620年)

者は、このベーコンの末裔であると言えなくもない。神は創造に際して人間に「地を従わせよ」、全ての被造物を「支配せよ」と戒められた（創世記1・27）。技術はこの神の戒めに応答して、被造世界を統御するユニークな人間活動である（ビショップ、既出）⁴⁰。キリスト教にとってテクノロジーに反対する理由はどこにもない。いや、キリスト教こそ実に近代テクノロジーを生み出した基盤だったのであり、少なくともヨーロッパではキリスト教とテクノロジーは「密接かつ神秘的に」関係してきた。今でこそテクノロジーは教会のもとを離れてしまったが、もともとは墮落後の人類を支え、アダムさえ持ちえなかった力を得させようとする神の賜物、いっそう人間を豊かにしようとする神の恩寵の表われである。イエズス会のカトリック神学者ウィルヘルム・フアドパッカーは人類の祖アダムは技術を用いることで神の戒めに従順であろうとした、その末裔たるわれわれも同じ責任を負うと、現代技術を積極的に援護してはばからない（W.フアドパッカー「キリスト教神学から技術的キリスト教へ」）⁴¹。

技術は神の賜物であって人類の救いに欠かせないという、こうした積極論は、技術を人間理性の果実と見るフアドパッカーのようなカトリックだけではなく、プロテスタント、それも後千年王国説を採る福音派の神学者間に少なくない。ポール・マーシャルもそんな技術を積極的に評価する福音派の一人で、技術が人間に不可欠なことは、神がアダムとエバに樂園を「耕して守るように」（創世記2・15）命じられたことから明らかだと主張する（マーシャル、既出）。技術は人間の世界統治に欠くことのできない媒体であって、神の救済は技術発展と歩調を合わせて進行する⁴²。人間は神に背いて墮落した。しかしそれでも「聖なる都、新しいエルサレム」（黙示録21・2）を築こうとして営々と技術を磨いてきた。聖なる都を復興しようと不断の努力を重ねてきたのであって、この技術という「世界統治のために神から与えられた賜物」に疑いの眼差しを向けるのは信仰的にも誤りである（マーシャル、前掲書）⁴³。

40 Bishop, "Towards a Christian View,"

41 Wilhelm E. Fudpucker, "Through Christian Theology to Technological Christianity," *Theology and Technology: Essays in Christian Analysis and Exegesis*, ed. Carl Mitcham and Jim Grote (Lanham, New York and London: University Press of America, 1984) pp.56-57.

42 Marshall, "Modern Technology," p.35.

43 Ibid.

福音派による技術の高い評価は、技術が基督教の伝道に寄与するという実践的な観点も含んでいる（T. エレクソン「神学とテクノロジー」）⁴⁴。そもそもプロテスタント教会が今日のような興隆をみたのは、15世紀、グーテンベルクの印刷術で聖書の大量頒布が可能になった歴史に負うところが大きい。それまで聖書は手書きで写すほかなく、創世記の写本作業において一日一章の模写をノルマにすれば、修道僧が全章を書写するのに三カ月を要する。当然、聖書の数は限られ、教会や大聖堂、修道院の奥深くに収蔵され、閲読しようとすればいくつもの許可が必要で、めったに手にすることができなかった。印刷技術はそうした制約を根本的に取り払い、おかげでプロテスタントは興隆できた（P. フレッシュャー「テクノロジーと基督教」）⁴⁵。技術の積極的评价は、近年のインターネットやテレビを巧みに活用する福音派教会の伝道姿勢にも顕著である。アメリカ・メガチャーチの牧師にとって、インターネットは人の交流を希薄にするどころか、福音を社会の隅々にまで行き渡らせる「神に祝福された」技術である。また、テレビはテレビ伝道師にとって、教会に出席できない信徒に電波を通して福音を伝える格好の手段、「行ってすべての民をわたしの弟子にせよ」（マタイ28・19）というイエスの宣教命令を確実に、しかも安価に実現する道具である⁴⁶。

こうした技術礼賛論、言い換えれば、技術は人間が神の被造世界を統治するための手段、人間を労苦から解放して神の国にいたらせる救いの道具であるとの見方は、基督教が技術文明の発展に大いに寄与したと論じるハーヴィ・コックスを始め、20世紀後半の進歩的神学者の多くにも見て取れる（.ボークマン、既出）⁴⁷。テクノロジーは彼らにとって神の「恩寵の表現に他ならない」のである⁴⁸。

44 Thomas L. Erekson, "Theology and Technology," (May, 2001). <http://speeches.byu.edu/reader/reader.php?id=864>

45 Paul Flesher, "Technology and Christianity," *Religion Today*, blog. October 31, 2007. <http://religion-today.blogspot.com/2007/10/technology-and-christianity.html>

46 Ibid.

47 Borgmann, *Power Failure*, p.95.

48 Ibid.p.97.

自然界の魔術からの解放は、自然科学の発展に対し一つの絶対的な先行条件を提供する。今日の技術都市は（中略）、人間が自然界に恐れを持たず対峙することができるようになるまで、本当の科学発展の突破口は開かれない⁴⁹。

コックスは、この初期作品や「技術世界におけるキリスト教徒の責任」⁵⁰等の論文において、西洋テクノロジーの発展は、聖書によるところが大であって、聖書が自然を脱呪術化したことで、はじめて人間による自然支配が可能になったと、手放して技術を称賛した。

先端技術が開花した「^{テクノポリス}技術都市」を絶賛したコックスと歩調を合わせ⁵¹、リベラル神学者のノリス・クラークも技術を神の「^{グッド・ミーンズ}善なる手段」と定義し、そもそも神が人間に知性を許されたのも、技術を発展させるためだったと主張した。技術は神の摂理にしたがって発展し、人間を時代時代に応じて自然から解放してきた。人間が技術によって自然から完全に自由になったとき、人は物質的だけでなく精神的にも完成する。そのためにも技術を臆することなく発展させることが肝要である（N.クラーク「技術と人間——そのキリスト教的展望」）⁵²。太古の人々にとって「われらに必要な糧を今日も与えたまえ」（マタイ6・11参照）という祈りは切実な願望であって、技術はそうした「日用の糧」（panis noster quotidianus）を確保する労苦から人間を自由にした。特に近代以後のめざましい技術革新は、飢え渴く者を援助せよとのイエスの勧告（マタイ25・31-46）を、人類史上はじめて実現可能にした。クラークはキリスト教倫理の観点から、テクノロジーを積極的に評価してやまないのである。

49 H.コックス著、塩月賢太郎訳『世俗都市』（新教出版社、1967年）45頁。また、志茂望信訳『愚者の饗宴』（新教出版社、1971年）、船本弘毅訳『世俗化時代の人間』（新教出版社、1969年）等も参照のこと。コックスは、技術が今日、宗教的にも大きな役割があつて、いかなるテクノロジーを使うかはそれぞれに教會的根拠を必要とすると言うのである。

50 Harvey Cox, "The Responsibility of the Christian in a World of Technology," *Science and Religion*, ed. Ian G. Barbour (New York: Harper & Row, 1968)

51 コックス『世俗都市』、20頁。

52 W. Norris Clarke, S. J., "Technology and Man: A Christian Vision," in *Science and Religion*, ed. Barbour. クラークのように、テクノロジーを前向きに受容するプロテスタント神学者は、保守と進歩主義を問わず数多い。

2-3 原子力は神の賜物である

技術は神に祝福された人類救済の手段という、こうした理解の延長にあるのが、原発を始め、核テクノロジーを前向きに評価する神学言説である。神の人類救済の計画は、唐突ではなくゆるやかに、すなわち人間の文明の進展に従って少しずつ啓示される（スウェレンゲン、既出）⁵³。世界が破滅的な戦争へと突入した1939年、神は計画にしたがって、宇宙創造の秘密を人間に開示された。すなわちアメリカの科学者と技術者を用いて核分裂理論と技術を開発させ、核エネルギー利用の道を開かせた。ウラン235の原子核が中性子を取り込むと核分裂が起き、その際に膨大な核エネルギーが発生する。もしこのプロセスを制御できれば、まったく新しいエネルギーを人類は確保することになる。原子構造の秘密を解き明かす科学と、核分裂による莫大なエネルギーを解放する技術は、そのものとしては神の意志にかなっている。世俗的とはいえ、20世紀の技術が宇宙創造の根源的エネルギーを、原子力発電の実用段階にまで高めたことは、神の意志に完全に一致する。たしかに核兵器という核技術の悪用の危険性はある。サタンは思いもよらないとき、善意の人間さえ動かしてその支配力を振おうとする。しかし、そのことに慎重な注意を払いさえすれば、核技術は人類に貢献する巨大な力になる。原子力発電は大気を汚染せず安全安価であって、新しいエネルギー源としては理想的である。原発技術を徒に恐怖するなら、それはいかなる技術革新にも反対した19世紀のイギリス・ドラッグイト運動の誤謬を踏襲するだけで、近視眼的な態度と言わざるをえない⁵⁴。

イエズス会神父で、神の救済を宇宙規模の歴史で捉えた20世紀の特異な神学者、ピエール・ティヤール・ド・シャルダン⁵⁵は、核技術をもって人類は輝かしい未来に大きく舵をきった、近い将来に「宇宙そのものの再編」すら夢ではなくなつたと、核テクノロジーを絶賛した（P.ティヤール「原爆の精神的反応に関する一考察」）⁵⁵。ティヤールが夢に描いたのは、核技術によって人類がひとつとなり、ついには宇宙を征服するという壮大な未来

53 Swearengen, *Beyond Paradise*, p.285.

54 “Mini Nuclear Plants,” *The Wittenberg Door*

55 Pierre Teilhard de Chardin, “Some Reflections on the Spiritual Repercussions of the Atom Bomb,” *The Future of Man*, translated by Norman Denny, (Harper & Row, 1964); *The Future of Man*, trans. Norman Denny, (London: Collins, 1964). また、『ティヤール・ド・シャルダン著作集』全11巻（みすず書房、1968年—）を参照せよ。

図である。人類はテクノロジーを梃子にして神の救済史に参与する。たとえ富や快適さの増大といった世俗的動機に基づいていても、現代のテクノロジーは「地の支配と改造」、神の国の実現という宇宙論的目標に適っている。厭うべきは、そうした神の創造への積極的参与を拒む憶病な精神であって、人類進化の希望は絶えざる技術革新にこそある。ティヤールにとって、核技術は人類を大きく前進させるものに他ならなかった。

日本に原爆が投下され、巨大なエネルギーが放出されたことを知ったとき、ティヤールは、それは「人を陶醉させるほど圧倒的」ではあるが、しかし、今後起こるであろう「数々の奇蹟」に比べれば、「ほんの幕開け、いや前奏曲にすぎない」と述べた（ティヤール、前掲書）。今や「オメガ・ポイント」に向けて壮大な進化に道を踏み出した人類は、将来、核分裂によるエネルギーをもとにして、あらゆる自然を支配するにちがいない。人類最初の核分裂が、原爆という破壊を目的したものだったにもかかわらず、それを歴史の輝かし一頁とし、科学の偉大な勝利と讃えたのである（ティヤール、前掲論文）⁵⁶。

ティヤールは、ヒトラーのファシズム、スターリンの独裁主義を20世紀の「実験の小さな失敗」として片づけた。それと全く同じように、日本への原爆投下は長い歴史の尺度からすれば、ほんのエピソードにすぎないと一蹴した。ティヤールにとって、原爆はどんなに技術が巨大な潜在力をもっているかの象徴であって、ここに彼が「モダニズムの追従者」と批判されるゆえんがある⁵⁷。人間の罪がどれほど技術を捻じ曲げるか、悪用して大惨事をもたらすかの恐れがないのである。ティヤールが生きた時代は、まだ技術の環境への悪影響が深く認識されていない時代であって、それは仕方のないことだったかもしれない。人間が自然の一部であることを否定し、自然からの解放を夢みた彼は、人間が物質界の桎梏から抜け出て、歴史の未来へと跳躍する基盤を技術に求めた。ティヤールにとって世界は徹底的に人間中心的であって、その意味では、自然は人間の引き立て役でしかなかったのである⁵⁸。

本題に戻ろう。そんなティヤールの夢に歩調を合わせ、原子力を人類に与えられたプ

56 Teilhard, Ibid.

57 George Grant, *Technology and Empire: Perspectives on North America* (Toronto: House of Anansi, 1969) p.44. その一方でティヤールは、第二次大戦後の世界連邦構想を人類統合への礎石と考え、その反対者や懐疑者を人類進化の妨害者と捉えて激しく非難している。

58 Barbour, *Ethics*, p.8.

ロメテウスの火と仰いで、そこに宗教的情熱を吹き込んでいるのが、昨今のニューエイジの科学信仰である⁵⁹。「技術者こそ未来の人類である」(ブラヴァースキー)⁶⁰。1990年代の半ば、宗教と科学を綴り合わせたニューエイジ宗教は、今日、人類はこれまでとは全く違った世界、「神の約束の時代」の戸口に立っていると論じた。技術の発達によって政治、経済、イデオロギーは一新され、グローバルな頭脳、心臓、感覚、そして魂をもった新人類が誕生する。そして、おそらく宇宙の歴史から見ても、それは非常にユニークな出来事にちがいない⁶¹。ニューエイジの科学積極論者は、神が21世紀を「人類覚醒の時代」と定められた、今こそ新人類の黄金期が始まろうとしているとの喜びを隠さない⁶²。

テクノロジーと人間理性への信頼——こうした楽観的な西洋技術観、ひいては原発に対する積極的な神学的意味づけの背後にあるのは、人間を「神の似姿」と見る前向きのキリスト教人間論である。神は人間を自らの姿に似せて創造された。「神が(創造において)意図されたのは人間がやがて神とひとつになること」であって、人類史は実際、歩みを続けるなかで、やがて人間は神と等しい知識と力をもつようになるだろう。シカゴ学派の物理学者リチャード・シードは、西洋の千年間に及ぶ技術発展の根底にある人間観を、そうした言葉をもって神学的に要約した。それは、かつてフランシス・ベーコンが、人間は四足で歩く動物ではなく、死すべき運命ではあるものの、すぐれた知性をもった「神々」とであると定義したのと軌を同じくするのである(ノーブル、既出)⁶³。

59 Lee Penn, *False Dawn: The United Religions Initiative, Globalism, and the Quest for a One-World Religion*, (Hillsdale: New York: Sophia Perennis, 2004)

60 Helena.P. Blavatsky, *The Secret Doctrine: The Synthesis of Science, Religion, and Philosophy*, Vol.II - Anthropogenesis, (Theosophical University Press, 1999), p.446.

61 Robert Muller, "Foreword: Preparing for the Next Millennium," in Joel Beversluis, ed. *A Source Book for the Earth's Community of Religions*, cited by Barbara Marx Hubbard, *The Evolutionary Journey: A Personal Guide to a Positive Future*, (Evolutionary Press, San Francisco, 1982), p.11. ここでバーバラ・ハバードは「われわれは人類史の最も偉大な時代の入り口に立つ」と述べている。

62 Neale Donald Walsch, *Friendship with God: An Uncommon Dialogue* (G.P. Putnam's Sons, 1999) p.295.

63 Noble, *The Religion*, p.i.

2-4 原発は創造主のわざ

原子力はエネルギーを安価に、かつ安定的に供給することで人類から貧困を追放し、人類の可能性を広げる。核テクノロジーは人類進歩の偉大な勝利であって、それに背を向けるのは愚行である——原発礼賛論の多くが、核を世界に先駆けて開発し、その後原発大国のトップに躍り出たアメリカから発信されたこと、そして50年代から60年代に頂点を迎えたことは驚くに当たらない⁶⁴。日本への原爆投下直後、ロックフェラー研究所の一物理学者は、核の潜在的力は大部分を水中に隠す氷山にも似て、原爆だけではとうてい語り尽くせないと論じ、原子力によって人類史は「一挙に数世紀前進した」と、手放しの喜びようだった（B.プレーゲル「パワーと進歩」）⁶⁵。

原発大国のアメリカは、人口の9割が世論調査において神の存在を信じると答える「熱烈な宗教国家」である⁶⁶。スリーマイル島事故を契機に、それまでのような手放しの原発礼賛は影をひそめたものの、今日でも原発を「神の賜物」と神学的に基礎づける言説は少なくない。そんなひとつが、戦後、オークリッジ核研究所を創設し、カオス理論の先駆者ともなったウィリアム・G・ボラードの原発擁護論である。一級の核物理学者で聖公会司祭でもあったボラードは、『機会と摂理——科学法則における神の行為』（58年）、『科学と信仰』（70年）、『エネルギーの道徳的意味』（81年）など、科学と宗教の対話、量子力学と神学の統合、宗教と先端技術の接点を模索したほか、核エネルギー問題についても数々の発表をしてきた研究者である（ニコラス・サウンダース『神のわざと現代科学』）⁶⁷。

第二次大戦中、ロスアラモスには馳せ参じなかったものの、原爆開発のマンハッタン計画にウラン235の抽出理論をもって貢献したボラードは、原子力は神の摂理にかなった技術であると論じて、戦後アメリカの原発推進の強力な論客になった。彼にとって、原発

64 Thomas Reed, *At the Abyss: An Insider's History of the Cold War* (Presidio Press, 2004), cited in *Beyond Paradise*, p.33.

65 Boris Pregel, "Power and Progress," *Nation*, December 22, 1945, p.711; Joseph H. Willits, "Social Adjustments to Atomic Energy," *Proceedings of the American Philosophical Society* 90 (January 1946): 48.

66 栗林輝夫『キリスト教帝国アメリカ』（キリスト新聞社、2005年）を参照のこと。

67 この点でボラードは、カール・ハイム、J.J.トーマス、アーサー・コンプトン、ジョージ・トムソン、エリック・マスカールなどの立場に近い。

を神に背く危険な技術と難じることは聖書的に誤り以外の何物でもない（「核エネルギーの神学的見解」）⁶⁸。神の世界創造からすれば、核エネルギーは宇宙の自然的現象であって、石炭、石油、ガスを酸素と混ぜて燃烧させる火力発電の方が、よほど「不自然」である。太陽は莫大な熱量を放出する核融合の塊り、いわば「宇宙の原発」であって、広大な宇宙にはそうした巨大原発が無数に存在する。もしそうした核融合がなければ、宇宙は光も熱も、さらには生命体の片鱗すらない死の空間だっただろう。核エネルギーは、神の創造においてまったく自然な出来事で、今、人類はやっとその一つを造ったにすぎず、規模からいえば戸口に軽く触れた程度でしかない。もし原発を神の意志に反するという人がいたら、その人は、聖書の神を信じていないも同然である。ニケア信条は神を「天と地、すべて見えるものと見えざるものの創り主」と告白し、ヨハネ福音書は「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった」と綴っている（ヨハネ福音書1・1、3）。「天の大空に光る物があって、地を照らせ」（創世記1・15）と聖書に描かれた太陽は、創造主のわざの産物で、核融合や核分裂を神の創造に反すると主張すれば、それは聖書的創造観を退けることになる。それでもなお原発を悪とするのなら、宇宙を善と悪の闘争の場と見て、善は良き創造、悪は悪の手になると峻別したマニ教やゾロアスター教の異端に陥ることになる。宇宙という巨視的視野からすれば、核分裂も核融合も実に「自然的」であって、神の創造意思に反することは少しもない。人類が石油資源の枯渇という重大危機に直面した今日、神は摂理によって原子エネルギーの秘密を人類に開示された。神は創造のとき、「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」（創世記1・28）と人類を祝福され、被造物の「すべてを支配せよ」（同）と命じられた。人類が数を増し世界の隅々にまで住みつくようになった今、世界を支配せよとの神の戒めがようやく実行可能になった。原発はそのために神から贈与された技術であって、神の「祝福の初穂」に他ならない。ポラードはわれわれは原発を感謝をもって受け入れるべきで、拒む理由はひとつもないと、原発推進を一貫して主張したのである。

こうしてポラードを始め、戦後アメリカの原発推進論者は教会内でも、核テクノロジーの廃棄は単純で誤った選択であると論じ続けた。無論、核兵器は全廃されるに越したこと

68 William G. Pollard, "A Theological View of Nuclear Energy," *Journal of American Scientific Affiliation*, June 1980, 70-74.

はなく、それを願うのが正しいキリスト教徒である。しかし原発はそれとは目的が異なり、人類の幸福に資する技術であって、神の贖罪に寄与すると、ひたすら擁護に努めたのである。

3. 原発は危険な偶像神である

3-1 核技術は破滅への道 神学的応答

「われわれは（善悪の）分別を欠いたまま核エネルギー時代に突入した」⁶⁹。神が人間に託した被造世界の支配は原子力をもって大きく前進した、という核テクノロジー肯定論とは対照的に、核技術を神の領域への侵犯、神の戒めに対する背信とする見方は、原爆実験の成功直後に生まれた。1945年、ロスアラモスの上空に史上初の核爆弾が炸裂したとき、巨大なエネルギーの放出を目撃した人々は、「全能神のもとに統御された力を人間が手懐けること自体が冒涇ではないか」と直感的に恐れた。核爆発で「大地が振憾し、天空が真二つに割れた光景」を目前にしたとき、科学者のひとりとは、「神が光あれと命じられると光が生まれた、という世界創造の瞬間に立ち会った思い」がし、それが神への背信ではないかと危ぶんだという（R. ジュング『千の太陽より明るく——原子科学者たちの個人史』）⁷⁰。原爆計画を「トリニティ」（三位一体の神）のコード・ネームで統括した実験責任者、ロバート・オッペンハイマーも、巨大な火の玉の炸裂を見て、思わず「われは死の神、世の破壊者」というヒンズー教の『ヴァガ・ギータ』の一節を思い起こし、われわれはとんでもないことをしたのではないかと心を震わした⁷¹。キリスト教倫理学者のラインホルド・ニーバーは、原爆によって「科学への無条件的信頼と、技術が人類に幸福をもたらすという啓蒙主義以来の楽観主義が消え去った」と述懐した。ヨーロッパで啓蒙主義が起こって以後、人々は科学を楽観的に信頼し、技術を開発していけば、地上に豊かな楽園を造ることも不可能ではない、と夢に描いてきた。しかし、

69 French W. Anderson, "Gene Therapy," *Scientific American* (September, 1995): 124-28.

70 Robert Jungk, *Brighter than a Thousand Suns: A Personal History of the Atomic Scientists* (Mariner Books, 1970)

71 Jane Caputi, *Gossips, Gorgons & Crones: the Fate of the Earth* (Santa Fe, NM, Bear & Company, 1993) p.62.

今や科学技術は人間を幸福にするどころか、人類破滅の道を拓いた。とてつもない破壊力によって世界終焉の可能性がいつそう現実的になった。ニーバーは、科学技術の進歩が人類を救済するという希望は、核時代の到来をもって永久に葬り去られた、と危機を露にしたのである⁷²。

ニーバーと共に、いや彼以上に、核技術に「^{ジ・エイジ・オブ・エフィシェント・ケイオス}効率的カオスの時代」の到来を見て憂慮したのはエドワード・ロングである。科学者は人間の手になる初の核分裂を「科学の偉大な勝利」と祝っているが、はたしてそうか。歴史上、人類は核エネルギーほど巨大な力を手にしたことはなく、それを正しく統御できると誰が自信をもって言えようか。しかも、この未知にして凄まじいまでの破壊力を管理するのは神ならぬ、「罪の下にある人間」である（E.ロング「核脅威へのキリスト教的応答」）⁷³。日本ではほぼ無名なロングは大学で物理学を専攻した後、ニューヨーク・ユニオン神学校に進んでニーバー、ベネットの薫陶を受け、科学者の宗教倫理を主題にした論文で博士号を取得⁷⁴、ドルーの神学大学院で長く教鞭をとり、全米キリスト教倫理学会の会長を歴任するなど、戦後アメリカの指導的なキリスト教倫理学者の一人だった。

第二次大戦後から冷戦の50年代、原発に対するアメリカの神学者の否定的見解は、その多くが原発技術がいつ何時、大量破壊兵器に利用されないとも限らないという実際の恐れに基づいていた。核兵器に反対なら、当然、原発にも反対しなければならない。ナチス支配下のドイツから亡命し、ユニオン、ハーヴァードと教鞭をとったティリッヒは、核テクノロジーの戦争使用をきびしく批判した。破壊的力ある核技術を批判し、科学が人類を究極的に脅かすことになった、一瞬にして世界全体に死をもたらす可能性を生み出したと警戒した。核という「科学最大の産物」によって人類は「崩壊と混乱のなかに投げ出され」、人類の存続すら危ぶまれる。問題は、神の似姿に創造された人間がその知性を誤用し、世界を絶滅させるパンドラの箱を開いてしまったことにある。よしんば核戦争に勝った国があったとしても、勝者は「かつて聖書の預言者らがそうだったように、進歩ではなく崩壊、幸福ではなく滅亡を告げられるにちがいない」とティリッヒは論じたのである（Z.ロドリゲス「パ

72 Boyer, *By the Bomb's*, pp.98,232.

73 Edward L. Long, Jr., *The Christian Response to the Atomic Crisis* (Philadelphia: The Westminster Press,1949) p.99.

74 Boyer, *By the Bombs*, p.232.

ウル・ティリッヒと核兵器」)⁷⁵。

他方、原子力は人の精神を荒廃させると警句を発したのは、イギリスのカトリック神学者ロナルド・ノックスである。核文明は、これまで以上に攻撃的で、自分の安逸だけを気づかう個人主義を蔓延させるにちがいない。いつ戦争が勃発して原爆が炸裂するかもしれないとの不安は人に恒常的な緊張を強いる。核に閉じ込められていたエネルギーが一気に爆発するというのなら、それと同じことが人間の精神に起きても不思議はない。道徳の力で辛うじて押さえられていた人間の本能は、タガを失い社会に無政府主義をひき起こす。科学が人間の心に、抑制ではなく爆発のイメージを刻むのであれば、いったい誰が人に自制や節度を求めることができようか (R.ノックス『神と原子』)⁷⁶

こうした核技術に対する危機や不安の感情は、核戦争を想定したもので、原発事故に直接言及したものではない。しかし、今日か明日かと原発事故を恐れる人間心理と社会的不安は、いつ核戦争が勃発するかもしれないという不安に通じる。すでに触れたロングは、核時代の人間は、原子力の危険性に向き合おうとせず、むしろ脅威を忘れようとして思考を遮断し、放蕩へ逃避するようになると憂いた。未来よりも今、他者より自分が大事というエゴイズムを助長すると危惧した。核戦争の可能性から目を背け、利根的な生を求めて娯楽に興じ、大衆スポーツに憂さを忘れ、アルコールや薬物に逃げ込む振る舞いは想像に難くない。諦念の感情が社会を被い、どうせ明日はわからないから「今を愉しめ」(Carpe diem) と、利根的生き方が流布するのではないかと憂えたのである (ロング、既出)⁷⁷。

75 ティリッヒは、東西冷戦下のベルリン危機において、核兵器をソビエトに使用すべきか否かを論じるエレノア・ルーズヴェルト主宰の公開討論会に招かれた時、神学の立場から核兵器絶対反対を表明した。(Zachary Rodriguez, "Paul Tillich and Nuclear Weapons," *Paul Tillich Resources*, http://people.bu.edu/wwildman/tillich/resources/popculture_nuclear01_rodriguez.htm). ちなみに、この討論会に招かれた他のメンバーは、後の国務長官ヘンリー・キッシンジャー、ニューヨークタイムス紙のジェームス・レストン、当時の国務長官ディーン・ラスク、英国マンチェスター・ガーディアン紙のワシントン特派員マックス・フリードマンの4人。ティリッヒは、ユニオン神学校の同僚ニーバーやベネットと同じく原爆使用に反対したものの、レストンはそれを理想主義と一蹴している。

76 Ronald A. Knox, *God and Atom* (New York: Sheed & Ward, 1945)

77 Long, *The Christian Response*, p.96.

他方、80年代、原発に関してプロセス神学者のジョン・カブが警告したのは、事故の可能性に伴う道徳の低下、核技術によって無限なエネルギーを手に入れたという人間の奢りである。原発によって人類は自らの手で必要なエネルギーを無尽蔵に獲得したといわれるが、本当にそうなのか。「原発テクノロジーが人類にはほぼ無限の生産と消費の機会を備えたとしても、幾世代にもわたって、事故と破壊を防ぐシステムは果たして可能なのか」。未来にシステムの完成を無責任に期待するよりも、原発の制約性を認めて、今を道徳的に生きることが重要ではないのか⁷⁸。

カトリック神学者ショーン・マクドナーも、原発の廃止と、それに代替する「緑のエネルギー」の開発を唱え、ローマ教皇庁に原発支持を止めるよう訴えた。ローマ教皇庁は、核エネルギーを、地球温暖化の問題を前にして化石燃料よりも良い選択と判断しているが、それは大変な間違いである。原発は事故が起これば温暖化に倍する環境破壊をもたらす上、核燃料廃棄物の処理も見通しが不透明である。二酸化炭素の排出問題は、この数十年間というもの、それを甘く受け止めてきたことが原因である。1万年以上にもわたって放射線を出し続ける核廃棄物は、未来世代にもたらす悪影響では見当がつかない程に甚大である。廃棄物を地中深くに埋めたところで、それが洩れ出る危険は排除できず、原発を教会の名によって推奨することは問題ではないかと、疑問を投じたのである。

3-2 エリユールの悲観的技術論

核は人間を破滅に導くだけではなく、神の領分を侵してはいまいか。鈴木伶子は高木仁三郎のそうした見方に触れながら、原発を「神の領域に踏み込んだ放漫な人間」の産物として批判する（「核」否定の思想に立つ）⁷⁹。たとえできるとしても、人間にはあえて手を出してはならない技術がある。技術をもつということはたしかに、被造物を保全せよという神の戒めへの適切な応答である。道具や機械を工夫して自然に働きかけ、環境を人間のために整える営みそのものは正しい。しかし技術はときとして意図しない危険を招き、とくに核技術の場合には、危険のスケールが大きい。加えて、莫大なエネルギー

78 John B. Cobb, *Process Theology As Political Theology* (Philadelphia: The Westminster Press, 1982) pp.122-123.

79 鈴木伶子「「核」否定の思想に立つ」『原発とキリスト教』（新教出版社、2011年）154頁

源になるとはいえ、罪ある人間は原発をいつ何時、大量破壊兵器の製造へと利用しないともかぎらない。楽観論とは対照的に、核技術を人類への重大な脅威と見る神学評論は少なくない。

その代表的な一つが、フランス改革派教会に属し、核テクノロジーを非合理主義の極みと批判したジャック・エリュールの反原発論である。エリュールが特に気遣ったのは、自国フランスの高速増殖炉スーパーフェニックスの技術である⁸⁰。原発を危惧する人々は、原子炉で生成されるプルトニウムが核兵器に転用されることや、核拡散の危険性、核燃料廃棄物の処理が未解決なことなどをあげる。それともたしかにそうである。しかしそうした「古典的」な危惧よりもいっそう重大なのが、高速増殖炉の事故リスクだとエリュールは言う。

減速材を用いない高速増殖炉はこの上なく危険である。出力は通常の原子炉より一千倍も速く、核連鎖の反応もきわめて簡単に起きる。スーパーフェニックスの稼働には、液体ナトリウム5千トン、プルトニウム5.5トンが必要なのだが、そのわずかな量でも重大事故につながる。メルトダウンが起これば、スーパーフェニックスは広島型原爆の数千倍の放射性物質を撒き散らし、プルトニウムが大気中に拡散すれば、ほんの数ミリグラムでも致命的になる。過酷な事故は今のところ起きていない。だが増殖炉が随所で稼働すれば、事故は起こるべくして起こるだろう⁸¹。

エリュールは、カール・マルクスとカール・バルトという「二人のカール」との「決定的な邂逅」を通して、独自の科学技術論を構築した哲学者である。とりわけバルト神学への造詣は深く、バルトを20世紀最大の神学者と讃えて⁸²、神の審判と恩寵というバルトの

80 Jacques Ellul, tr. by Geoffrey W. Bromiley, *The Technological Bluff* (Grand Rapids, Mich. Wm. B. Eerdmans, 1990) pp.235-237.

81 Ibid, p.236. フランスの高速増殖炉スーパーフェニックス(これに類するのが日本の「もんじゅ」)は、エリュールが危惧したように事故続きで現在は稼働中止。

82 Jacques Ellul, *Jacques Ellul on Religion*, Technology, Politics (University of South Florida 1999) p. 4. エリュールは世界教会協議会専門委員を務め、「グローバルに考え、ローカルに行動する」(Penser globalement, agir localement) のスローガンの考案者としても知られる。エリュール著、島尾永康・竹岡敬温訳『技術社会・上』(すぐ書房、1975年)、島巢美知郎・

主題のもとでユニークな技術神学論を築き上げた⁸³。エリユールの主題は、テクノロジー下における人間の自由とキリスト教の役割、現代人が蒙る「技術独裁」^{テクノジカル・ディラニー}とそれからの救済である。

技術の宗教性に深くメスを入れたエリユールにとって、技術は一言でいえば、人間の敵である⁸⁴。技術は、触れるもの一切を非人間化せずにはおかない、統制不可能な力である。技術の粋を尽くした先端機械は、ひとたび稼働するや、あれを直せ、これを改良せよと次々に要求し、人はその要求に従わざるをえなくなる。テクノロジーはそれ自体の合理性をもつ点できわめて自律的で、それに人間が抗うことは難しく、結局、唯唯諾諾として人は自由を奪われていく⁸⁵。エリユールの技術概念は、ものを造るという技工だけでなく、それによって影響を受ける社会、政治、経済、文化、宗教といった広い人間領域を包括する。

5世紀、アウグスチヌスは『神の国』において、航海、被服工芸、建築、医薬、武器製造など、技術は「驚嘆すべき成果」を人にもたらしてきたと、技術を前向きに評価した。アウグスチヌスによれば、こうしたさまざまな技術は「地上の国」を旅する人間には、なくてはならないものである。技術に不慣れな人は、鍛冶屋の仕事場に入ると、ごうごうと火を吐く釜や、見なれない数々の工具を見て恐れる。しかし、鍛冶職人は工具の使い方をしっかり会得し、信頼に足る。さそりの毒は使用方法が適切なら、薬になって人を癒す。アダムとエバの墮落後、人類は自分の身は自分で護るしかないという厳しい自然環境のなかで生きざるを得なかった。したがって技術は人間の生存のためには手放せない。だがそれでも、技術は人間の「悲惨な生活にわずかばかりの慰めを添えるだけ」で、技術そのものでもって「墮落した人間が救済されるわけではない」。人間の真の贖いは、神の恩寵によって神の国がもたらされるときに成就する。人間的な技術のわざなど、

倉橋重史訳『技術社会・下』（すぐ書房、1976年）、伊藤晃訳『現代人は何を信ずべきか——「技術環境」時代と信仰』（春秋社、1989年）等を見よ。また松谷邦英『技術社会を<超えて>——ジャック・エリユールの社会哲学』（見洋書房、2010年）等の解説書も参照せよ。

83 Darrel Fasching, *Jacques Ellul: A Systemic Exposition* (E. Mellen Press, 1981), p.35. ファシングによれば、エリユールは生涯を通じて、現代テクノロジーが、「所与の実体を非神聖化する」と共に、それ自身で「新しい聖なる実体に変貌する」と確信していた。

84 Barbour, *Ethics*, p.10.

85 Ibid.

そのときの圧倒的な恵みに比べれば、無に等しい。アウグスチヌスは、技術を人間にとって不可欠と述べるものの、それほど多くを期待していたわけではなかった（E.フォーティン「アウグスチヌス、工芸、人間の進歩」）⁸⁶。

エリユールは、人間的な技術と神の圧倒的な恩寵という、このアウグスチヌスの対比を踏まえて、テクノロジーは人間にはほんの少しの安逸をもたらすものの、それ以上の意味はないと一蹴する。そもそも墮落前のアダムとエバに技術は不要だったし、未来に神の国が成就した暁には、技術に何の価値もない。ところが現代人は、自分の手で造り出したにもかかわらず、技術を「救世主」であるかのように崇め、その要求するところに唯々諾々と服従する。技術は超越的神性と何ら相似性がないにもかかわらず、技術を神にし、本当の聖書の神を忘却する。テクノロジーを万能神のごとくに礼拝する現代人は、真の神を冒瀆し、機械を「贖い主」にする偶像崇拜の罪に陥っている。人類の救いはひとえに超越的神の「上からの恩寵」に依存する（エリユール「技術と創世記の開放的性格」）⁸⁷。

エリユールは、現代人は技術のさまざまな成果に幻惑され、それに抗えないとの徹底した悲観主義の立場をとった。技術は自己増殖的で、人間と社会に絶大な支配力を振るう。技術者、科学者は言うに及ばず、政治家も知識人も一般市民も、巨大化した技術をコントロールする術のないまま振り回される。もはや技術を飼い馴らすことは人間に不可能で、人間の生の領域すべてが技術の「独裁的支配」に組み込まれ、そこから逃れる方法はない⁸⁸。唯一、希望があるとすれば、それは、技術の罪を暴き出す聖書の預言者の倫理のみであって、それが技術社会の暴虐に抵抗する力を備えてくれかもしれない（同上）。だが、テクノロジーからの解放がなるかどうかは、ひとえに神の手にあつて人間にはない。エリユールは技術社会の行方に極端に悲観的である（D.ファシング「ジャッ

86 Ernest Fortin, "Augustine, the Arts, and Human Progress," *Theology and Technology: Essays in Christian Analysis and Exegesis*, eds., Carl Mitcham and Jim Grote (Lanham, MD: University Press of America, 1984). また、St. Augustine, *The City of God* (Garden City, NY: Doubleday, 1958), pp.526-526. を参照のこと。

87 Jacques Ellul, "Technique and the Opening Character of Genesis," in Carl Mitcham and Jim Grote, eds., *Theology and Technology* (Lanham, Md.: University Press of America, 1984) p.135. エリユールに限らず、技術の偶像崇拜化はしばしば指摘される。Marshall, "Modern Technology," pp.258-65.

88 Jacques Ellul, John Wilkinson et.al.trans., *The Technological Society* (Vintage Books, 1967)

ク・エリユールの神学的倫理における黙示録的弁証法とユートピア」)⁸⁹。

技術社会の未来がそれほどまでに絶望的かどうかの判断は別として、エリユールが指摘する技術の偶像化は、原発にも妥当している。野中宏樹は、福島第一原発事故を「ひれ伏してはならぬものにひれ伏してきた」日本の戦後政治の当然の結果と論評する。そして「この国は偶像に満たされ、手の業、指の造った物にひれ伏す」（イザヤ2・8）と聖書を引用し、これこそ日本の「傲慢な」原子力行政の帰着点に他ならないと論じた⁹⁰。イザヤが警告した、経済的繁栄を謳歌し政治的に強大国になったユダ王国の人々のさまは、原発という「人の手によって作り出されたものを信じ（あるいは信じさせられた）」ひれ伏してきた日本人の姿である、というのである。

3-3 暴走する現代の技術と権力

従来でも、社会学者や政治学者の間には、テクノロジーが自律的システムではないかと警戒する者が少なくなかった。テクノロジーは、ひとたびシステムが完成して稼働し始めれば、技術者、科学者、企業主、政治家の誰が名目上の管理者になろうと、問題ではない。人々は技術の成果に目が釘づけになり、システムを変えたり止めたりしようとは思わなくなる。技術は自己増殖的に発展し、政治も経済もそれを支えるために整備され、一般市民もマスコミを通して、システムが潤滑に機能できるよう洗脳される。機械は部分毎に纏まってひとつの巨大な体系になり、技術そのものの原理で稼働する。その結果、機械はブレーキのきかないまま自走し、人間のためという目的を離れて、技術そのものの合理性に基づいて暴走し始め、やがて科学者にも技術者にも「予測外」「想定外」の事態が次々に起こり出す。ヨーロッパ中世の童話に、箒に水を運ばせて自分は楽をしようとした魔術師の弟子の話がある。習いたての呪文を唱えたものの、箒の止め方を知らず、

89 Darrell Fasching, "The Dialectic of Apocalypse and Utopia in the Theological Ethics of Jacques Ellul," *Research in Philosophy and Technology*, vol.10, ed. Frederick Ferré (Greenwich, CT: JAI Press, 1990). 最近の研究では、エリユールは晩年に至って、キリスト教のラディカルな自由概念が、時間を必要とするものの、遂にテクノロジーの進歩の幻想を打ち砕いて技術転換する「慎みある希望」を抱いていたと示唆する。しかし、エリユール自身はそれを明言しているわけではなく、著作の大部分はその可能性について悲観的である。

90 野中宏樹「佐賀にて見る時のしるし」『原発とキリスト教』82-89頁。

桶から溢れ出る水の前で茫然となるという筋書きである。制御のきかなくなった技術を前に、現代人はこの童話と同じように、茫然と途方に暮れるばかりではないのか。こんなはずではなかったと臍を噛んでははいまいか。複雑化した技術は、コントロールされるどころか、かえって人間を隷属させる怪物に成長する（L.ウィナー『自律的技術』）⁹¹。

倫理学者ハンス・ヨナスが指摘するのは、現代テクノロジーのこうした暴走に対応できず、後手にまわっている倫理である。西洋の倫理は、技術がまだ小規模な時代にはそれなりに対応できていた。人間に及ぼす技術の効果を測って、その善悪を判定できていた。ところが、今日のテクノロジーは、規模が大きく複雑な上、すさまじい速度で開発が進み、しっかり時間をかけて善し悪しを検討している余裕がない。時間をかければ開発競争に負けてしまう可能性があるからで、気がついたときには、すでに後戻りできない危険にどっぷり浸かっている。技術開発はリスクを充分に計算に入れておく必要があり、そのためには技術がもたらす当面の利益より、最悪の場合を想定した処方箋作りにまず注意が払われるべきである。こうしてヨナスは未来世代への責任として、技術のモラルを早急に整備するよう提唱した。大規模で複雑な技術事故は「事前予測が非常に困難なことを考慮すれば、ルール作りとしては、幸福の預言よりも破滅の預言に耳を傾けるのが現実的である」⁹²。つまりヨナスは、技術から「最大の利益を引き出す」ことに熱中するよりも、技術が起こしかねない「災害を最小限に食い止める」手立てに最大の注意と努力が払われねばならない、と言うのである。核テクノロジーに関して言えば、すでに人類は広島・長崎を経験した以上、人類絶滅の可能性を孕む核開発は、原発を含め、すべて中止されるべきというのがヨナスの結論である（H.ヨナス『責任という原理』）⁹³。

他方、哲学者のアルバート・ボーグマンが推奨するのは、技術以前に戻れとまで言わないものの、技術を「賢く取捨選択」すること、人間に真に寄与する技術のみを選択して、他をあえて断念することだった（A.ボーグマン『技術と現代生活の特徴』）⁹⁴。われわれ

91 Langdon Winner, *Autonomous Technology* (Cambridge: MIT Press, 1977); *The Reactor and the Whale* (Chicago: University of Chicago Press, 1984), p.x.

92 ハンス・ヨナス著、加藤尚武監訳『責任という原理——科学技術のための倫理学の試み』（東信堂、2000年）

93 ヨナス、前掲書。

94 Albert Borgmann, *Technology and the Character of Contemporary Life* (Chicago: University of Chicago Press, 1984)

は従来、技術が進歩して生産と消費が増えれば、それだけ人間の生が豊かに向上する
と考えてきた。しかし得たのは味気ない暮らしぶりと、虚ろな余暇だけだったのではないか。
街のファーストフード・レストランは従来の家族団欒の食卓を駆逐して、喜びのない、画
一的なメニューだけの場となった。余暇も同じで、レジャー産業は、金をかければそれだ
け質の高い娯楽が得られると宣伝して、何が何でも消費へと人を駆り立ててきた。なるほ
ど、レジャーランドの一日は一時的な高揚感を与えてくれる。だが終って家に帰ってみれば、
残るのは疲労感だけである。むしろ人間が求めるべきは、静かに音楽に耳を傾け、森を
ゆったりと散策し、ジョギングをしたり、ベンチで家族と会話を愉しむことではないのか。ボー
グマンは、鉄道や航空といった大量輸送のテクノロジーの存在を認めるものの、もっと小
規模でローカルなテクノロジーを増やすべきだと提言する。中央集権的な巨大テクノロジー
への依存度を弱め、地域社会の誰もが参加できる、シンプル・ライフを基軸にした、環境
と人にやさしいテクノロジーへと脱皮すべきだ、というのである⁹⁵。自転車のペダルを漕いで、
ゆっくり時間をかけて風景を愉しむことの方が、自動車を猛スピードで走らせて断片的な
印象を得るより、ずっと人間的に豊かではないのか。ボーグマンも、その師のハイデッガー
も、エネルギー消費の大きさと人間の幸福度を計る時代は終わった、むしろ技術進歩で
人が失ったものは多いと、技術の在り方を根本的に転換するよう要請する (P.ラスレット『わ
れらが喪失した世界』)⁹⁶。

また、テクノロジーの権力を取り上げて問題にする識者も少なくない。社会心理学者の
デイヴィッド・キプニス^{ヒュプリス}は技術者の「奢り」の心理学を論じ、技術専門家はとかく高慢に
なりがちで、そのことで個人と社会に深刻な悪影響を与えることが多いことを指摘する。
技術のノウハウを独占する人間は、企業の技術者だろうと、政府の官僚だろうと、技術
の保持を自分の優秀性と取り違え、知識の乏しい人々を見下す傾向にある。かつて帝
国主義華やかなりし時代、アジアやアフリカに出向いた欧米の軍人は、強力な銃火器で
現地の住民を威圧し、プランテーションの白人経営者は進んだ農耕機械や栽培技術で
農園労働者を圧倒した。人々が驚嘆し畏怖したのは技術の優秀さだったにもかかわらず、

95 Martin Heidegger, *The Question Concerning Technology*, trans. William Lovitt (New York: Harper & Row, 1977).

96 Peter Laslett, *The World We Have Lost*, (New York: Scribner, 1984). pp.122-52.

欧米人は人格的にも、自分たちの方が格段に優れていると奢った。今日も病院では医者
 は患者をしばしば「もの」扱いし、病状を丁寧に説明するどころか、話してもどうせわか
 らないと、横柄な態度を取り続けている。オートメ化の進んだ工場では、大学を出たばかり
 のエンジニアやマネージャーが、年季の入った熟練工を顎で使ったりもする。技術を独
 占する人間は、とかく肥大化した自己イメージで尊大になる。キプニス⁹⁷は、重大な政策決
 定であつても、民主的手続きを経ることなく独断専行になりがちだと、技術と権力の相関
 性を指摘した(D.キプニス『技術と権力』)⁹⁷。福島第一原発事故の前、原発事故の
 恐れを指摘した市民や市井の科学者は少なくなかった。しかし政府も原発企業も、そうし
 た指摘を科学的に根拠のない、素人談義として一蹴した。そこにキプニスが言う専門家の
 「奢り」があつたのではないか、という疑念が生まれるのである。

3-4 技術は人間を疎外する

聖書的に言えば、技術はアダムとエバの楽園喪失後に始まったことになる。まだ楽園
 にあつたころ、アダムとエバが原始的な技術を用いた可能性は排除できないものの、本
 格的に技術が凝らされ始めたのは失楽園後のことである。アダムとエバの子で兄弟を殺
 害したカインは「エデンの東、ノド（さすらい）の地」（創世記4・16）に追放され、そ
 こに「町を建て」（同4・17）、その子孫トバル・カインは「青銅や鉄でいろいろな道具を
 作る」（同4・22）技術者になった。これを先達として人類は、墮落の結果、人間に敵
 対して猛威を振るようになった自然から身を守るためにも、また日々のパンを得る労苦を軽
 減するためにも、懸命に技術の開発に取り組んだ。その甲斐あつて、人間の技術は次
 第に高度なものへとなっていった。だが人間は、技術を、自分の労苦を和らげるためだ
 けでなく、ことさらに自分の力を誇示するため（「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有
 名になろう」創世記11・4）、他の人間を破壊する手段としても開発するようになった⁹⁸。
 レメクの歌が「カインのための復讐が七倍なら、レメクのためには七十七倍」（創世記4・

⁹⁷ David Kipnis, *Technology and Power* (Berlin: Springer-Verlag, 1990)

⁹⁸ 松本敏之『神の美しい世界・創世記1～11章による世界』（キリスト新聞社、2010年）のう
 ち、「技術の進歩と武器の発達」166頁以下を参照のこと。

23-24)と歌ったように、技術は破壊の規模を増し⁹⁹、戦争の際には殺傷力を飛躍的に高めて、その破壊は押し留まるところがなくなった。とくに近代に入ってからというもの、技術の破壊性は規模が大きくなり、それに反発したキリスト教徒の少なくない部分を非戦主義、反技術主義へと駆り立てた。

19世紀初頭、アイルランド信徒運動に起源を発したプリマス・ブレザレンは、武器をもたない平和主義と、テクノロジーの数々に懐疑的な点で、アーミッシュ、メノナイト、クウェーカーに通じる。かれらは、カルヴァン派の信仰と宗教的な敬虔主義を綴り合わせ、聖職制をもたない平等主義を採用し、とくに「ラブチャー」を唱えたジョン・ダービーのディスペンゼーション（天啓史観）に強い影響を受けた聖書主義の立場をとる。たとえば、技術のすべてを否定するわけではないものの、とくに保守的な「^{エクススクルーシヴ}排他的ブレザレン」は、コンピューターを「悪魔の手」と判じて、信者の子弟を公教育のコンピューター授業から免除するように提訴したりもしてきた¹⁰⁰。コンピューターを使い始めると、子供達は夢中になって、それを万能の神、「救世主」のように崇めだす。そのことは「主のほかに神はいない」（申命記4・15-43参照）と、偶像崇拜を禁じたモーセの十戒に違反する、というのがその理由である（「〈排他的〉ブレザレン——その教育的デレンマ」）¹⁰¹。

機械を神のように仰げば、人間の心は貧しく敬虔な宗教感情も衰える。そのように論じ始めれば、世俗的な人の理解からすれば、なんと時代錯誤な、と一笑に付されるかもしれない。今日の人間にとっては、欠乏に悩まされ続けた人類史に終止符を打つのもテクノロジー、人間を自由で豊かに変えてくれるのもテクノロジーと、好いことづくめである。だが、本当にそうだろうか。人間の欲望はあれもこれもと際限がなく、昨日までの贅沢品は今日の必需品になる。物質的に豊かでありたいと渴く心はいつも不満を抱えて落ち着かない。もし技術に人間の豊かさを定義させてしまえば、人は多くのものを失うにちがいない。プリマス・ブレザレンは、そのように技術を把えて、技術を手にすれば、人はそれを麻薬のように手放せなくなる、そしてついにはその奴隷になりさがる、ときわめて警戒感が強い（ビ

99 Bishop, "Towards a Christian View,"

100 1989年にアメリカ全国学校教育協議会に提出されたプリマス・ブレザレン保護者1400名連名の要望書。

101 Stephen Bigger, "'Exclusive' Brethren: an Educational Dilemma," 1990. <http://eprints.worc.ac.uk/241/1/EXCLUSIVES.pdf>

ショップ、既出)¹⁰²。

こうしたプリマス・ブレザレンや、電気、電話、自動車の使用を忌避するアーミッシュは、キリスト教でも極端な例である。しかし、これほど強硬ではないものの、技術は人間に疎外をもたらすことが少なくないと神学者のパウル・ティリッヒは論じた。技術は神が人間に与えたユニークな力であって、人が技術を用いてももの造りに精を出すのは良いことである。しかし神から離れた今日の技術は、あらゆる自然を商取引の対象にし、神の創造からエロスを削ぎ落す。とりわけ資本主義経済はそれが顕著で、企業に利益を生む技術だけが優秀な技術として崇められる。「これこそテクノロジーの神話、技術生産物のカルティック・コンセクレーションカルト的 神聖化である」¹⁰³。ティリッヒは晩年のライフワーク『組織神学』のなかで、技術のあるべき姿を「神律」^{セオノミー}に結んで、もの造りが今日のような、味もそっけもない営みではなく、神の究極的な深み、「主体的な質」をもつことを願った。「聖霊の働きのもとで(中略)物はたんなる物ではなく、金槌から精緻なコンピューターにいたるまで、すべてが形式と意味を有してエロスの対象になる」。現代のテクノロジーすべてが神律と対立するわけではない。しかし「技術的合理主義」が人間の生を侵蝕している今日、エロスの復興が欠かせないと、技術の転換を求めたのである¹⁰⁴。

他方、技術が人間の精神を支配すれば、人は神を見失うと危機感を露わにしたのは、カトリックの実存主義哲学者ガブリエル・マルセルである。かつて人々は技術を操りながらも、それがもたらす成果に驚嘆し、神の恩寵に感謝してその実を味わったものだった。ところが今日、技術の安手の利便性は、人に感謝させることも、人間実存の深みに思いをいたらせることもない。技術専門家はどんな問題でも技術的に解決可能と豪語し、人間ですら技術操作の対象にするが、それは実に危険である¹⁰⁵。現代のテクノロジーは商品の規格化を通して大量生産、大量販売を可能にした。しかし結局、物から個性を剥奪するだけに終わった。人々はますます技術システムに飼い馴らされ、薄手の文化に安んじて、地域間の豊かな伝統も平準化される。社会の規格に合わない者は疎んじられ、技術に

¹⁰² Steve Bishop, "Towards a Christian View,"

¹⁰³ Paul Tillich, *Systematic Theology*, Vol.1 (University of Chicago Press, 1967) p.84.

¹⁰⁴ Ibid.

¹⁰⁵ Gabriel Marcel, "The Sacred in the Technological Age," *Theology Today* 19 (1962) :27-38.

従順な者だけが報われる結果、人は技術の奴隷になって、人間実存から聖のオーラがなくなっていく。人々の交流ですら機器を介して営まれ、自分が誰かは機械の一歯車となることで計られる。技術礼賛者は、コンピューター化、オートメ化は人間を格段に自由で快適にしたと吹聴する。だが、そうだという確かな証拠はほとんどない（マルセル「テクノロジー時代の聖」）¹⁰⁶。

マーティン・ブーバーも、現代技術に恐れを抱いた一人である。もし計量的な技術が社会を統御するなら、人と神、個人と個人の「開かれた相互性」が失われる。互いに親密な「われと汝」ではなく、冷たい「われとそれ」の関係が支配的になる¹⁰⁷。テクノロジーは人から人間味を駆逐し、社会をロボットのような機能的で専門的な関係に貶しめる。真摯な人間相互の交わりは脅かされ、機械部品のように管理され、組織目標の達成だけが至上の命題になる一方、責任の所在はあいまいで、誰一人として道徳的責任を感じない。それはとりもなおさず、個人を「もの」として扱うことに他ならない。

最後にもうひとつ、現代技術が宗教にマイナスの効果をもたらすとの警告を取り上げて、この項を終わることにしよう。神学者のP.H.サンは、ハイテク社会はキリスト教に百害あって一利なしと批判する（P.サン「技術を神学的に考察する初期方法について」）¹⁰⁸。効率を専らとするハイテク産業は、祈りという人間古来の営みを排除する。現代技術は合理的組織を促し、活動の細分化、専門化、スピード化、最大効率を要求する。そこで求められるのは目標の達成、言い換えれば、目標をいかにスピーディに、かつ無駄なコストなしに実現するかという狭い問題意識であって、その結果、人的要素は無視され、量が質の基準を上回る。労働環境は殺伐とし、働く者は機械の奴隷と化してノルマとスケジュールに追われ、成果を出せと強いられる。今日の産業社会で満足や達成感を得られるのは、成功したほんの一握りの人間にすぎない。マスメディアは新製品の需要を人工的に作り出し、本当にそれが必要かどうかに関係なく、消費を刺激して生産の道を邁進する。サンは、技術社会の成功第一、消費優先のこうした指向性は、宗教が育む謙遜

106 Ibid.

107 マルティン・ブーバー著、植田重雄訳『我と汝・対話』（岩波書店、1979年）を参照のこと。

108 P. Hans Sun, "Notes on How to Begin to Think about Technology in a Theological Way," *Theology and Technology*, ed. Carl Micham and Jim Grote (New York: University Press of America, 1984)

と畏敬という価値とは水と油だと言うのである。

4. 原発か、それとも代替テクノロジーか

4-1 原発は止められない？

ここまで本稿は、テクノロジーに対する評価がキリスト教的欧米では二分され、その点では核技術についても同じことが言えることを概観してきた。現代は生活の隅々にまで技術が網羅された「テクノロジーの時代」である。それに対応して先端テクノロジーたる原発にもキリスト教的に賛否両論があり、それを積極的に擁護する言説がある一方、廃絶を強く訴える立場もある。その意味で言えば、核テクノロジーは決してキリスト教と無縁でもなく、価値中立的でもなかった。いや、それどころか、核技術者のなかには、宗教的とも言える情熱と召命感を抱いて熱心に開発に取り組んだ者もいたのである。しかし問題は、そうした努力は尊敬に値するものの、いったいその努力がどこに向かうのか、技術がどんなリスクを伴うものなのかについて、思慮が充分ではないことにある。言い換えれば、テクノロジーの環境コストや災害リスクが、従来あまりに簡単に脇に片付けられていたのである（バーバー、既出）¹⁰⁹。核技術の推進論者は、たとえ技術に問題が生じて事故が起きても、技術改良によって解決できると楽観的である。しかし、はたして原発は統御できる技術なのか。今回の原発事故では深刻な放射能漏れが起き、日本の科学技術の総力をあげてそれに対処する努力が今の時点も行われている。そうした努力が実を結び、放射能汚染の度合いを薄め、クリーンにする技術もやがて開発されていくかもしれない。しかし、これからも技術的にどう対処すればいいのかもわからない、未知の事態が起こる可能性も排除できないのである。はたして核技術は根本的に危険であって、人間が手を出してはいけない技術ではないのか。事故の再発を考えれば、原発は廃止されるべきではないのか、他の代替エネルギーへの模索が正しいのではないのか、という思いがごく自然にわき起こる。

しかし、この点で気になるのはエリュールの技術決定論である。すでに触れたように、エリュールは、原発のような巨大テクノロジーはひとたび稼働するや、それを止めたり廃し

¹⁰⁹ Barbour, Ethics, pp.17-18.

たりすることはほぼ絶望的になると、きわめて悲観的だった。人々は、自分で編み出したにもかかわらず、技術を救世主のように崇め、それなしに生活できなくなる。とくに現代技術は自己増殖的であって、そのシステムのもとに文化、経済、政治を統制して人間と社会に絶大な力を振う。エリユールは、この独裁的な技術から逃れる術はなく、テクノロジーはいったん走り出したら非可逆的で前に進むのみと言うのである。

バルトと共に弁証法神学を担ったエーミル・ブルンナーもテクノロジーの非可逆性に気づいた一人である。技術のめざすところは物の生産であって、それによって人間は生活の必要を満たす。ブルンナーは、技術は基本的には「贖罪的」で、その開発には技術者本人の創意の喜びといった動機も働くが、多くは社会的要求に依存すると論じ、次のように述べる。

知識は一方向に発達する。(中略) テクノロジーの歴史は後戻りのない歴史である。ある世代が発見をすれば、次の世代が発明をする。原始的な石器から始まって鉄鋼とコンクリートの現代にいたるまで、技術は絶えず集積され、子供が大人に成長するように「発展」する。だが、次世紀はいつどこに辿りつくのか(『反抗する人間』)¹¹⁰。

テクノロジーの未来に危惧をもつものの、ここでブルンナーが吐露しているのも、エリユールに通じたテクノロジーの非可逆性、止めることのできない性格である。

こうしたブルンナーやエリユールの技術不可逆論に響き合うかのように、文化評論家の佐和隆光は、技術は、いっそう進んだ技術に取って代わられることはあっても、「不備なり危険性のゆえに放棄された」という事例を、寡聞にしてかわたしは知らない」と述べる¹¹¹。技術はひとたび選択されれば、改良が加えられることはあっても、廃されることはない。その意味では、50年代後半、日本政府が原子力の開発を国策として定めたことは、「後もどりの利かない、予想を上回る重大な意思決定だった」と言うのである。もしエリユールや

110 Emil Brunner, *Man in Revolt: A Christian Anthropology* (Cambridge, England & Philadelphia, PA: The Westminster Press, 1939) pp.183,455.

111 佐和『文化としての技術』、17頁

佐和の言説を額面通りに受け取れば、われわれは今更、原発を廃止することはできない、ということになる。すでに賽は投げられ、ルビコンを渡った。原発の技術開発に巨大な投資をしてきた上、そのシステムにどっぷり浸かってきた日本人にとって、原発の稼働停止は手遅れで、その廃止は絶望的なまでに不可能なのだろうか。

原発はいやだけれども、付き合うしかしかたがない、運命にまかせるといった諦念は敗北主義に他ならない。もし原発施策に何の手を打つことができないのであれば、原発反対の意思表示も無益で、結局、原発企業とそれを後押しする経済界、政界にすべての選択を委ねることになる。どんな努力も徒労であれば、それは自己憐憫的な「終わりの日の預言」にもなりかねない。

しかし、技術は開発されれば止められないというエリユール流の技術決定論は、研究者間にそれほど支持を集めているわけでない。それに、メルケル政権下のドイツは、日本の原発事故を受けて、2020年に自国の原発を全廃する決定を下しており、それにむけた行程表さえ発表した。すなわち、「キリスト教の伝統およびヨーロッパの文化から、自然に対して人間が特別な責任を持つ」という神学視点を含めたドイツ倫理委員会の報告を受け入れて、原発廃止に踏み切ったのである¹¹²。そうした点を踏まえれば、ここで、技術の「神律」への転換を訴えたパウル・ティリッヒの技術神学論に言及しておくのは、意味あることである。

ティリッヒの技術神学は、近代以降のテクノロジーに深い憂慮をもった点では、エリユールの技術悲観論に通じている。西洋近代は科学に全幅の信頼を寄せ、合理性に土台を据えた技術発展に人類の明るい未来を託した。だが「技術的理性は、技術がいかなる目的でなければならないかについて、何らの指示も与えない」¹¹³。たとえ破壊が目的であっても、技術はそのことに無頓着に開発され、「人間は自分が造り出したものに呑み込まれていく」¹¹⁴。本来、技術は人間を労苦から少しでも解放しようと編み出されたものであって、その意味では「創造的、贖罪的」である。しかしティリッヒは、技術には破壊と抑圧に

112 三島憲一訳・解説「原発利用に倫理的根拠はない——ドイツ倫理委員会の報告書より」『世界』2012年1月号、88頁。

113 パウル・ティリッヒ「現代の世界状況」、『ティリッヒ著作集』第8巻(白水社、1999年)、293頁。

114 ティリッヒ、前掲書、294頁。

働く「^{デモニーッシュ}悪魔的」な性格があることを説き、それを阻止すべく現代技術の転換を求めた(ティルヒ「象徴としての技術国家」)¹¹⁵。技術は自律的で、人間の手に負えなくなることがしばしばあるが、手をこまねいてはいけいない。自律的で世俗的な技術理解に抗して、それを「神律」へとリセットすべきこと、そして人間にはそれがなお可能であるとして次のように述べた。

もしテクノロジーが一切を統御するなら、人間の生は確実に貧しくなる。数量、管理、統制が人間の交わりを失わせ、宗教的な畏敬感情も無用の長物になる。だが、そうした否定的側面は、技術そのものというより、人間の飽くなき物欲主義、テクノロジーへの無批判的依存によるところが大きい。肝心なのはいかなる技術を選択するかを、人間と環境の価値に照らして慎重に判断することであり、人間はそれが出来るのである¹¹⁶。

人間にはどの技術を伸ばし、どの技術を廃すべきかという判断力、実行力が備わっている。ティルヒは技術を神律、すなわち神の国の理念にしっかり繋げとめれば、「技術そのものが贖われる」と展望する。このティルヒと同じく、原発を直接論じてはいないものの、技術の選択を強く示唆するのは、キリスト教倫理学者の久世了である。残念なことに現代日本のテクノロジーの多くは企業利益という目先のことがらを追い、消費者にいたずらに購買欲を煽って、貴重な自然資源をむだ使いする。今日の日本にとっては何が「本当の人間の幸福に結びつくのか」を問うことが重要で、それによってどの技術が最適か選択する判断をすべきだというのである¹¹⁷。キリスト教倫理学者ノーマン・ファラメリも、技術は正しくリセットすれば人間の解放、エコロジーへの貢献は計り知れず、リスク管理を行って民主的監視のもとで法を整備すれば、技術はキリスト教的にも正しい方向に転換できる、

115 “Die technische Stadt als Symbol,” *Dresdener Neueste Nachrichten*, No.115 (Mai 17, 1928), s.5.; James Luther Adams, *Paul Tillich's Philosophy of Culture, Science & Religion*, p.105.

116 Ibid.

117 久世了「現代経済と生活倫理」『福音と世界』1971年9月号、11頁。

と前向きである（N.ファラメリ『テクノ倫理——技術時代のキリスト教の使命』）¹¹⁸。原発も、われわれが止めようとすれば止められるのである。

4-2 「神の国」の技術に向けて

「すべて良きものは神の国の徴しであって、喜びをもって受け取る対象である」¹¹⁹。もし特定のテクノロジーが神の創造に平和を増し加えるなら、それはたしかに神の国の徴しになる。人類に必要なエネルギーを備え、人にも自然にやさしいのであれば、これ以上の神の賜物はなく、それを選択することは神に対する証しとなる。神の国に向けた技術の選択は、エキクメニカルなキリスト教においても一貫して、求められてきた。70年代初頭、世界キリスト教協議会（WCC）の技術・信仰部会は、人間の基本的必要を満たすということでは、技術は「神の祝福の下にある」と述べた後、しかし、すべての技術が神の国に仕えるわけではなく、危機をもたらす技術もあると指摘し、「人間共同体の真の必要に奉仕する」ものを注意深く選り分けるよう勧告した（R.シン他編『愛か滅びか——技術危機と教会』）¹²⁰。一般にどの技術を選択するかは社会の動向に左右され、経済利害も絡めば、政治や文化、さらには人間の価値観やモラルの問題も絡んでくる。しかしキリスト教の場合には、それらにも増して、神の国というキリスト教のヴィジョンに根本的に関わってくる（「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」マタイ6・33）。言い換えれば、どの技術をもって必要なエネルギーを確保するのか、原発か、それとも代替エネルギーかの問題は、国の産業や政治にとつてどれが最良なのかだけでなく、正義、愛、公平のヴィジョンにいずれが忠実なのかを慎重に見極めることで結論が出る。

オランダ改革派神学者エグバート・シュールマンは、西洋世界がルネサンス以後、「自

118 Norman J. Faramelli, *Technethics : Christian Mission in an Age of Technology* (New York: Friendship Press, 1971). ファラメリは、神の創造に対する人間のスチュワードシップ、グローバル時代における経済格差の是正、政治制度の必然的腐敗の罪などを、科学技術論と絡めながら論じたキリスト教倫理学者で、『テクノ倫理』や『環境と汝』などの著作がある。

119 Tim Stafford, *Surprised by Jesus* (Downers Grove, IL: IVP Books, 2006) p.134.

120 J. Edward Carothers, Margaret Mead, Daniel McCracken, and Roger Shinn, eds., *To Love or to Perish: The Technological Crisis and the Churches* (New York: Friendship Press, 1972); Paul Albrecht and Roger Shinn, eds., *Faith and Science in an Unjust World* (Geneva: World Council of Churches, 1980). ただし、70年代初頭という制約から、この答申には自然環境の保全という観点が無い。

然の支配」をめざして人間中心主義の弊害に陥り、神の創造を客体化してその搾取をほいままにできたと、現代テクノロジーを厳しく批判した。技術万能のイデオロギーが人々を「バビロン捕囚」して物質主義を拡げ、技術を偶像のように崇める傾向さえ生んだのが世俗的な西洋社会だった。技術は専ら消費材の開発に振り向けられ、必要以上の物欲を人心に掻き立てた結果、人の魂は貧しく、ぎすぎすしたものになった。こうした現実が変えられないかぎり、テクノロジーは、聖書に約束された神の国にも、キリストの贖罪にも人類を導くことはない。もし今日の技術をキリスト教的に転換することができるなら、すなわち、人間のエゴ中心ではなく神中心へと軌道を修正すれば、人は物質的充足だけでなく、霊的渴望も満たすことができる。神の国は神によってのみ成就し、技術がそれを実現することはない。だがそれでも、一方に神の創造、他方に終末という歴史の中間時に生きるわれわれは、神の完全な贖罪を待望しつつも、現時点で技術を「賢く」用いる義務を負う。技術は中立的ではなく、「神の主権のもとで」正しく管理されるべきものである。人間の自由に向けて、どの技術を用いるかは教会の信仰にとって最重要課題である（シュールマン『技術における信仰と希望』）¹²¹。

カトリックの進歩的の神学者バーナード・ロナガンが技術の方向転換を熱心に説いたのも、このシュールマンとはほぼ論旨を同じくする。ロナガンは、テクノロジーを前向きに評価しながらも、もしこのまま無軌道な開発が続けば、人類は早晩、崩壊の時を迎えると危機感を募らせた。今の大規模な技術は経験的に未知な要素が多く、いつ何時、想定外の事態を引き起こすかわからない。テクノロジーが、人間理性の喜ぶべき産物であることは肯定されねばならないが、十分な安全確保ができなければ、あえて維持する必要はない（T. テキッペ「技術論におけるバーナード・ロナガン」）¹²²。プロセス神学のチャールズ・ハートショーンも技術の「不確実性」を懸念し、その慎重な選択を説いている。

121 Egbert Schuurman, tr. by John Vriend, *Faith and Hope in Technology* (Clements Publishing, 2003). シュールマンは日本ではほぼ無名なもののオランダでは著名な神学者である。オランダ・キリスト教同盟所属の上院議員を務め、工科大学で教鞭をとる傍ら、改革派信仰に基づいてキリスト教技術論の著作を数多く書いている。

122 Terry J. Tekippe, "Bernard Lonergan: A Context of Technology," *Theology and Technology*, ed. Carl Mitcham and Jim Grote (Lanham, Md.: University Press of America, 1984) pp.71-90.

はたして原子力は神の国に合致した技術なのか、それともそうでないのか。残念なことに、シュールマンにしても、ロナガン、ハートショーンにしても、原発が人類にとっての賢い選択か否かについてはほとんど言及がなかった。しかし技術の暴走に手をこまねいて傍観したり、諦念に逃げ込むのはなく、それをキリスト教の倫理に照らし、もし合致しなければ、それを廃する勇気を要請した点では明瞭だった。

神の創造を守り、アダムさえ享受しえなかった神の国の豊饒性を待望する。このキリスト教的観点からすれば、福島第一原発事故が人間と自然双方を著しく損った事実はきわめて重い。もはや、原発はキリスト教の創造理解から称賛されることも、救済的観点から「神の賜物」と見ることも出来なくなったのではないのか。むしろわれわれの選択は、代替的テクノロジーの推奨にあるではないのか。たとえ目的が善であっても、大惨事を引き起こす可能性が払拭できなければ、原発を選ぶべきではないのではないのか。

これまで、核技術は目的に従って善にもなれば悪にもなると、素朴に受け入れられてきた。ナイフは患部を切り取るという目的にしたがえば、外科医の執刀メスになる。他方、殺人者の手に渡れば、人を殺める道具になる。それと同じく、核テクノロジーは悪用すれば大量破壊の兵器になり、「平和利用」すれば人類の幸福に資することが大と考えられてきた。たしかにエネルギーの安定的供給という点にかざれば、原発の目ざすところが善であることは疑いない。熱帯雨林の減少、地球の温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨や環境ホルモンの問題など、地球大規模で環境破壊が進むなか、二酸化炭素を排出しない原発はクリーンで理想的なエネルギー源として脚光を浴びてきた理由がそこにある。しかし、今度の原発事故は、ひとたび事故が起これば、原発は大規模な人身災害を起こし、自然に対する損傷も修復不能になることを痛切に感じさせた。もはや原発は、事故のリスクを抜きにして、その是非を論じることはできなくなった。原発は「絶対安全」ではなく、複雑で危険を伴う技術であることが痛いほど認識され、事故を想定してのリスクアセスメントが不可欠になった。

危機を招く技術は全廃すべきとの意見がある一方、技術はどれをとっても、必ず弊害を生むのであって、それは仕方がないという見方もある。原発廃止に踏み切れば、電力の安定供給ができず経済が混乱する。多少の被害には目をつぶって原発存続を選ぶことが現実的という意見がある他方、多少の不便はあっても、生命安全が最優先されるべ

きだとの価値判断もある。はたしてそのいずれを選ぶべきか。要はそのメリット、デメリットを慎重に考慮して、ことにかからなければならないということである。「新しいテクノロジーは、道徳上のデレンマを抱えている」(J.レニー「技術革命の不確実性」)¹²³。現代の先端的技术テクノロジーがさまざまな倫理的問題を孕んでいることは、これまでも指摘されてきた。遺伝子の組み換え問題ひとつを取って見ても、工業や農産業に活用するバイオテクノロジーは、重大な倫理的検討が必要と言われている。原発もその例外ではない。すでに、われわれは核テクノロジーに積極的、消極的の両論が神学的にあることを見てきたが、次に検討しなければならないのは、原発のリスク問題をキリスト教的倫理に照らして判断する作業である。それは原発のモラルを問うことと言い換えてもいい。

繰り返せば、テクノロジーは道徳的に中立ではなく、良いテクノロジーもあれば、悪いテクノロジーもある。神の戒めに照らして、危険なテクノロジーもあれば、輝くばかりの善へと向かうテクノロジーもある。聖書的に言えば、ノアとその一族、ひいては全人類を破滅から救った「箱舟」の技術(創世記6・14-17)は、生命保全の善なるテクノロジーである。他方、「バベルの塔」は人間的高慢の産物で、神が拒否された技術である(同11・1-9)(S. モンスマ編『責任を負う技術』)¹²⁴。そうした聖書の技術観をもってしたとき、原発はどのように判定されるのか。大規模な災害リスクを考えれば、原発テクノロジーは「平和利用」という目的は善であっても、放棄されるべきではないのか。いや、そもそも「信仰的に言っても、核の平和利用など本当にあるのか」(山上修平「放射能を聖書の視点から考える」)¹²⁵。われわれが次に検討すべきは、原発事故を正しく評価するリスク管理の問題であり、それをキリスト教倫理の視点から慎重に判断することなのである。

(以下次号)

123 John Rennie, "The Uncertainties of Technological Revolution." *Scientific American* (September, 1995) 57-58.

124 Stephen Monsma ed., *Responsible Technology* (Eerdmans, 1986)

125 山上、『原発とキリスト教』、既出、131頁。